
黒蜜

斎藤 美春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒蜜

【Nコード】

N5079C

【作者名】

斎藤 美春

【あらすじ】

血の繋がらない冬馬と千子は、兄妹でありながらお互いの気持ちを抑えることができずにいた。それぞれの葛藤を胸に秘めながら一つ一つ未来を探っていく。その先に何かあるのか。何が待っているのか。許されない想いの果てに辿り着いたものは…？

第一章 序章〜忘却〜（前書き）

美しい程に艶やかな、漆黒の甘い甘い蜜の味を一度知ってしまった蝶は、脚をもがれその鮮やかな羽根を手折られてしまう…。

暗い闇夜に吸い込まれてしまうかのように、静寂の中にただ滴る蜜の音が響き渡るだけ。

蝶は二度とその透き通るような美しい羽根で、あの大空を飛ぶことはできない。

第一章 序章〜忘却〜

四月十四日。

一人の女優が入籍した。

名前は、橘 美夜。

二十歳になりたての頃から徐々にブラウン管に出始めて早九年！。

自他ともに認めるその実力で数々の栄光を手にしてきた。

その類い稀なる才能と業績が、多忙かつ圧倒的人気を誇る今の座を作ったのだ。

今年で三十路を数える彼女は、兼ねてから噂されていた三十歳という若さで自らの店を構えたという実業家のシェフとついに籍を入れたのだ。

しかし、私はどうしてもこの女優が気に食わない。

抜群のスタイルと美貌は申し分なく兼ね備えているものの、彼女の表情はいつもどこか冷ややかなのだ。

大体なぜ彼女が生涯の伴侶として、実業家とはいえたかが一端の料理人なんかを選んだのか、私には到底理解できない。

彼女ならば、もっと条件の良い相手が山ほどいたに違いない。

心が狭いと言われても、私にはそう感じられて仕方がないのだ。

やはり、私は心が狭いのだろうか？

「うちではこんな粗末な食事しか用意できないけど、たくさん食べて下さいね。」

特別広いわけでもない、郊外に建つ一軒家。

都心から離れていて地価も安い。

新築でもなく、とりわけ目立つような作りでもないごく普通の家のリビング中央に置かれた角テーブルを囲んで、他愛もない会話が交

わされる。

食卓に並ぶのは、ごく一般家庭の料理の数々である。

「いいえ、私の家は幼い頃から母子家庭でこんなに家族揃って夕食を食べることなんてなかったですから、すごく幸せです。」

キッチンに背を向けて座る五十過ぎの母と無口に食す六十手前の父の向かいに、とてもこの家には似てもにつかない風貌の若い女性が座る。

私はその女性の隣で、静かに豆腐とわかめの浮かんだ味噌汁をそそる。

「そう言っただけでこっちも光栄だわ。ね、お父さん。」

「ああ。」

妻に言葉をかけられても不粹にしか答えない夫を無視して、さらに他愛もない話を続ける。

「冬馬が帰って来れるならもう少しマシな料理の一つでも用意できたんですけどねえ。何せ、自分の店を持ってからは何だかんだでいつも帰りは遅いのよ。」

女性は幸せそうな笑みを浮かべて、時折相づちをうちながら話を聞いている。

「妻となった美夜さん、あなたにも迷惑ばかりかけると思うけど、あの子のことよろしく願いますね。」

はい、と少しはにかみがちに女性は頷いた。そう。

一人違うオーラを放って夕食をとみにしている彼女こそ、今一般人である料理人との電撃入籍でマスコミを賑わせている大女優・橘美夜その人なのだ。

見事彼女を射止めた運高き一端の料理人・沢田 冬馬は私の兄なのである。

兄は今年で三十二を迎える。

「いえ、私の方こそ仕事が忙しくて妻として至らないところばかりでご迷惑おかけすると思いますが、よろしく願います。」

そう言つて、頭を下げながらにこりと微笑む彼女はやはり美しい。

「母さん、もういいだろう？ そんなに話掛けたらせつかくのオフだつていうのに、義姉さんゆっくり食事もできないじゃないか。」

もう一人父と同じような不粹な顔で、缶ビール片手に母に指図しながら私の横に座るのはこの家の次男・沢田 夏樹。

工科大学に通う、三年生だ。

「あら、そうね。いやあね、私ったらつい浮かれちゃってるものだから。お代わりもあるからゆっくりたくさん召し上がってね。千子、あなたもいつまでもだらだらと食べてないで食べ終わつた食器はちゃんと片付けなさいね。」

「はあい。」

気のない生返事をして食べ終わつた食器を重ねる。

「ねえお母さん、今日もお兄ちゃん遅いの？」

「そうよ、明日の仕込みですつて。もう本当にこの子ったら小さい頃からお兄ちゃんつ子で、二十二になった今だにそうなのよ。」

千子は溜め息をついてガタンと席を立つた。

流しの桶水の中に重ねた食器を浸すと、もう一度小さく溜め息をついた。

誰とも目を合わせずに、リビングから出て階段を上がる。

「おい、千子。ちよつとは美夜さんに笑顔の一つづも見せたらどうなんだよ。」

背中から夏樹の声がした。

「それとも、まだ兄貴を取られたような気になってるのかよ。いい年こいて兄貴つ子だなんてやめるよ、みつともない。笑われるぜ？ それより明日大学の講義休講になったんだ。ドライブでも行かね？」

「明日は会社の子と約束してるからまた今度ね。」

「何だよ、いつも今度今度つて一度だつて実現した試しじゃないじゃないか。俺知ってるぜ？ 兄貴とはたまに会社の帰りに会って食事してるだろ。子供の頃から何かにつけて兄貴兄貴つて、兄貴つつつても俺らとお前は血なんか繋がってないんだからな。」

「知ってるわよ。」

そうとだけ言い残して、パタンと自分の部屋に入って戸を閉めた。私はこの沢田家の実の娘ではない。

幼い頃不運の事故で両親を亡くした私は、亡くなった父の大学時代からの深い友人で、家族ぐるみの付き合いもあった沢田氏に引き取られたのだ。

それから実の娘のように十歳離れた兄の冬馬と、同じ年の夏樹と別け隔てなく幸せに育てられたのだ。

幸せなはずだったのに、何をどこで間違えてしまったのだろうか……？

千子は不意な動悸に襲われた。

部屋の扉にもたれたまま、千子はそのままその場にへたり込んだ。

夏樹が私に好意を寄せていることは、もう随分と前から知っていた。中学まではよくふざけ合っていたあの仲の良い双子風情であったのに、それは高校に上がってから一変したのだ。

しかし短大卒業後一般OLとなった今の千子にとって、夏樹は今も昔も双子風情であることに変わりはない。

千子のズクンズクンという、高鳴りにも似た激しい動悸はこれだけが原因ではなかった。

「ただいま。」

玄関から聞き慣れた声が響いた。

「あら、お帰り。今日は早かったのね。今、美夜さんも一緒に夕食してたところなのよ。冬馬、あなた夕飯は？」

「いや、いいよ。店で済ませてきたから。」

靴を脱ぎながら冬馬が答える。

「お帰りなさい、冬馬。」

リビングから出てきて、美夜も夫・冬馬を出迎える。

「ああ、ただいま。美夜はまだゆっくり食べてるよ。俺はまだちょっと片付けなきゃならない仕事が残ってるから、先に部屋に行つて

るよ。」

そう言つて冬馬は階段に足をかける。

「兄貴！また千子が兄貴の帰りが遅いからって不貞腐れてるよ。」
リビングから夏樹が叫んだ。

夏樹の訴えを無視して、冬馬は飄々と階段を登り終えると、千子の部屋の前でピタリと足を止めた。

また、千子も部屋の外でのやりとりを聞きながら、冬馬の気配を感じ取っていた。

千子は、たつと走つて急いでベッドに倒れ込んだ。
コンコンと戸をノックする音がして扉が開いた。

千子の胸は高鳴る。

「千子。」

冬馬のよく通る静かな声に、さらに千子の胸は高鳴った。

冬馬はそのまま後ろ手で戸を閉めると、カチャリと静かに鍵をかけた。

「別に不貞腐れてなんかないのに。またデートの誘いを断ったから嫌味なの。」

冬馬は、ははつと笑った。

「一度くらい付き合つてやれよ。お前だつてあいつの気持ち、知ってるんだろ。」

「だからこそ、一度でも行つてはダメなのよ。思わせ振りのことはすべきじゃない。」

「あいつも厄介なのに惚れたな。」

「誰が厄介者ですつて？」

千子は、ぱつと身を起こして振り返った。

その瞬間、冬馬の腕がそつと千子を抱き締めた。

一瞬時が止まる。

愛煙しているタバコと、飲食店厨房独特のいつもの臭いに外気が交じつたような不思議な感覚。

この瞬間の匂いが一番好きだと千子は改めて思った。

「お前もじゃないのか？美夜に嫉妬むき出しなのは。」

「分かってるのなら、何でこの家を出て二人で暮らさないの？お金ならたくさんあるでしょう。」

「金の問題じゃなくて、時間の余裕の問題なんだ。お互い忙しいんだよ。」

そうね、と半信半疑な眼差しを向けてから、千子は軽く流した。

「明日食事にでも行こうか。夕方、いつものホテルのラウンジで待ってるよ。」

「うん。」

「部屋は？」

そう聞かれて、千子はこくと頷いた。

「分かった。おふくろにはちゃんと連絡しとけよ。心配するから。」

「明日、美夜さんは？」

「仕事だよ。」

兄は少しだけ寂しそうに笑った。

兄は、寂しいのだ。

きつとそうなのだとか千子は思った。

「くれぐれも夏樹には気を付けろよ。」

そう言つて、冬馬は千子の唇に口付けてから部屋を出ていった。

胸の中が軋む。私たちの関係だけは誰にも知られてはいけない……。決して、誰にも。

罪悪感など、当の昔に越えた。

実の兄妹でこそないが、禁忌すれすれのこの甘い甘い甘美に、さらに不倫という黒い蜜が交ざっても何も変わりはない。

そんな気がした。

第二章 虚蝉

心の中はあの日からずっと空っぽのままなのに、待ち侘びていたかのように軀は熱くなる。

これが人間の性なのだとしたら、私はもう逆らう術を知らない。

そろそろ夏も暮れ、一日の終わりを告げるように赤く染まり始めた空に、つくつくぼうしの声が響く。

哀しく、たった七日だけという短い命を全うするかのように、その総ての力で声を張り上げる。

このホテルの一室も、何とも言えない張り詰めた空気と、例えようのないほど極上に甘い声で充満している。

滴る汗の粒と、なぞる舌先。

もがき苦しむように上げる声と、全てを壊すような揺れ。

まとわりつくような長く柔らかい髪と、震えるように這う指の先。

全てが緩い時間の流れの中で紡がれてゆくような、そんな錯覚に囚われて逃げることにすらできない。

長い脚と美しい羽根を失った蝶も、飢えた蜘蛛の前では同じ気持ちなのかもしれない。

今の私と。

目の前にある顔の額から一筋の汗道が下って、私の頬にぱたりと落ちる。

生温いその温度は、どうしても私を素直にはさせてくれない。

「ねえ、式は挙げないの？」

「こんな状況で、よくもそんな不粹なことが聞けるな。」

半分呆れたような笑みを浮かべて冬馬が言った。

困ったことを聞かれると、兄はいつもそんな風に答える。

それを分かっていて、それでいていつも私は聞く。

それは、そう答えてくれることを私がきつと望んでいて、それが誰より何より揺るぎないことを知っているからだ。

そしてそれは、ほんの少しの優越感と安心感を私にもたらししてくれる。

それが、唯一私の歪んだ愛情表現なのかもしれない。

「美夜の仕事の都合がつき次第、考えるつもりではいるよ。やつぱり女としては、ウェディングドレスに憧れるものだろうし。いや、美夜の場合は仕事でもう着てるかな。」

冬馬は少し苦笑して言った。

「千子もそうだろう？」

「私は別に。好きな人とずっと一緒に居られるのなら、何でもいい。」

半分は強がり、でも本音だった。

そんなつもりはなくても、つい冬馬に訴えるような感覚になってしまふ。

「強いて言えば、ウェディングフェアとかに行つて無料で何着も着れたらそれで満足！」

冬馬は笑つて、ごろんと千子の隣に転がった。

「千子らしいな！俺もそんな感じ。」

思わず千子も笑みがこぼれてしまふ。

「でも夏樹は違つだろうな。どつちかつて言つと、かなり派手にこだわつてそうだし。目に浮かぶな、あいつがタキシードやドレス一つで大騒ぎしてる様子が。」

何で今ここでその名前を出すのだらうと、千子は一人不粹な顔をして天井を見つめた。

「あいつと一緒になつたら、千子は一生苦労するな。」

「ならないから大丈夫よ。」

千子はずもぞと布団の中に潜り込むと、冬馬とは反対側を向いて膝を抱えた。もう何年も続いている関係……。

兄がどういつつもりでこの関係が続けるのか、私には分からない。けれど、馴らされてしまったこの軀は兄しか知らなくて、その他は知りたいとも思わない。

兄だけを知り、兄に抱きすくめられて、甘い言葉だけを囁かれながらいつも眠りに落ちたい。

それを恋と呼ぶのなら、そうなのかもしれない。

けれども、甘い言葉など兄はくれない。

兄の口から出される甘い言葉は、私のためのものではないからだ。でも、ただ愛しそうに苦しむように私の名前を何度も呼ぶ瞬間は、壊れてしまいそうなほど愛を感じるから、私はまた兄の背中に腕を回してしまう。冬馬は上体を起こし、ベッドの脇にあるサイドテーブルの上から、赤いマルボロのタバコを一本だけ取り出してライター
の火を点ける。

何年経つたろう？

血の繋がらない妹は、どれだけ自分を憎み、恨んでいるだろう。

あの日から……。

だけれども、少女からいつの間にか女へと成長していくその時間はあまりに早くて、急いて急いて仕方がない。

この腕の中だけで女であればいい。

この想いを恋と呼ぶには、あまりにも浅はかで身勝手過ぎる。

けれどこの腕の中で、その甘い声がその細い手が、いつもは兄と呼ぶ自分をただ一人の男として求めているように思われて、愚かだと知りながら束の間の夢を見る。

そんなはずはないのに、いつかは離れてしまうその身を抱きすくめている時間は、すごく穏やかだからこの腕を解いてあげられない。

ライターの火をそつとタバコに触れさせて、すうつと噴かした。口から出る白い煙が、まるで嘲笑っているかのように空で揺れて踊る。

千子は、くるりと身を返して冬馬を見つめた。

「タバコっておいしい？」

「まずい。」

冬馬は怪訝な顔をして見せた。

第三章 幼夢

幸せなはずだったのに、何をどこで間違えてしまったのだろうー…？

「千子ちゃんは、今日からうちの子になるのよ。仲良くしなさいね。」

七つになったばかりの千子は、冬馬と夏樹の母親の隣で無表情のまま立っていた。

千子の両親は、千子が生まれる前から無類の旅行好きだった。

よくいろんな地域を探索したり、車で巡ったりするのが唯一の楽しみだった。千子が生まれてからは、千子も連れ家族三人で出掛けるのが毎月一度の恒例行事となっていた。

その日も、いつもなら一人娘である千子も一緒に行くところだったが、たまたま近所の子供会キャンプと重なってしまったため予定していた九州への温泉旅行は、両親だけで行くことになったのだった。そして、あの悲惨な事故は起きた。

狭い道で対向車との正面衝突事故。

相手の運転手は、飲酒運転だったという。

ひどい事故で新聞にも載った。

相手の運転手も、そして千子の両親も即死だった…。

千子の身内は数少ない。

幼くして一人残された千子は、亡くなった父親の大学時代からの親友で、家族ぐるみの付き合いもあった沢田氏とその家族に引き取られることとなった。

生まれた時からずっと幼なじみとして育ってきた冬馬と夏樹とは、何の障害もなく誰もが思っていたより早く馴染んだ。

そして間もなく、沢田家の正式な養子となったのだ。

「今日から本当のお兄ちゃんだよ、千子。」

冬馬は精一杯笑って言った。

冬馬十七の夏のことだった。

千子と目線を合わすためにひざまずいて、無表情のままの千子の頭を優しく撫でた。

冬馬のその笑顔を見るなり千子の中で何かが息急き切ったように溢れて、千子は顔をぐしゃぐしゃにしながら大声を上げて泣いた。

自分の父親と母親の葬儀でも涙一つ見せなかった千子が、その時初めて大粒の涙を流したのだった。

それから八年、時は緩やかにでも確実に流れてゆく。小学生の千子は屈託がなくて、輝くような笑顔をした元気な女の子だった。寂しい顔なんて決して見せなかった。

「夏樹！千子！ちゃん体操服と上履き持ったか？遅刻するぞー！」
玄関先から、高校の制服に身を包んだ冬馬の叫ぶ声が響く。

「はあい！」

それに千子の元気な声が答える。

「ちよつと待つてよあー！」

満面の笑みで階段を駆け下りて来る千子の後ろから、夏樹もランドセルを背負いながら駆けてくる。

「忘れ物ないよ、お兄ちゃん！」

千子は満面の笑みを浮かべたまま冬馬を見上げた。

「よし！じゃあ行こう！急がないと遅刻する！」

「二人とも待つてつてばあ！」

玄関を出て歩き出す冬馬と千子の後ろから、履きかけの靴に手をかけながら夏樹も追い掛ける。

よく晴れた朝、いつもの風景。

実の弟と、血の繋がらない妹の手をひく。

「本当、千子ちゃんが毎日元気でいてくれることが何よりね。」

玄関先で、手を振り子供たちを見送る母親がぼそりと呟いた。

「ああ、そうだな。このうちに来た時の千子は、このまま笑顔を忘れてしまっんじゃないかと思ったが。」

後ろからスーツ姿の父親が出て来て言った。

「ええ。ずっとこのまま幸せな家族でいたらいいわね。ずっと……」
夏樹にも千子にも同じように接し、同じように可愛がる。

冬馬はそう決めていた。

千子が寂しくないように。

千子が悲しい思いをしないように。

千子がつらくなってしまうないように。

千子がいつも笑っていられるように。

澄み渡った空には雲一つなかった。「沢田さんのところの冬馬くんは、いつも弟さんと妹さんの面倒を見て偉いわね。」

近所の人たちはみんな口々にそういうことを言っていた。

そしてそんな声はいつもついて回った。

冬馬は部活もサッカーをしていたし、彼女だっていないわけではなかった。

けれども、その頃の冬馬にとっては何よりも千子を悲しませないことが一番であった。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」と元気に明るく笑う千子を冬馬はいつも微笑ましく思っていた。

それから千子が小学校に上がるまで、そんな関係は変わらなかった。相変わらず千子のお兄ちゃんっ子ぶりには、父親も母親も呆れるしかなかったが、それでも元気に育っていることが何よりだと喜んでいた。

冬馬は高校を卒業すると、料理の道へ進んだ。

父の知り合いでもあった、有名洋食店のオーナーシェフの元に弟子入りをする。

その頃からお店に泊まり込んだり、オーナーの家に泊まったりと、家に帰ってゆつくりとする時間はほとんどなくなったものの、それでも千子と顔を合わせればいくらでも千子を甘えさせた。

けれども千子が中学に上がるという頃、冬馬は海外へ行くことを決める。

洋食料理界の本場、フランスとイタリアへ三年。

本格的に料理を学び一流シェフを目指すためだった。

泣きじゃくる千子をなだめて、桜が咲きかけの頃冬馬は日本を発った。

そして、それから三年後。

あの日がやってくるのだ。

中学生の千子を、冬馬は知らない。

三年の間、冬馬は一度も日本には帰って来なかった。

手紙や電話越しの千子は、いつまで経っても小学生の千子のままだった。

しかし、時は確実に千子を成長させていく。

三年後帰国した冬馬は、千子と再会する。

十六になった千子はすっかり女になりつつあって、もう冬馬の知っている可愛い妹の千子ではなかった。

ミンミンミンミーーン…

唸るような暑さが体中にまとわりつく、あの暑い真夏の日。

外から聞こえる蝉の声だけが、やたら大きく響いていたあの日。

私たちは、罪を犯してしまう。

第四章 欲望（1）

それを恋と呼ぶのなら、そうなのかもしれない。

焼け付くような十六のあの日から、私の中の熱は引くことを知らない。

低く、よく通るその声が甘ければ甘いほど、私の手足はもがき苦しむのに。

私の身体は身動きすらとれなくなってしまうのに。

私は求めてしまう。

どうしようもない程に、あの人の心と身体を。

自分の両親の葬儀でも泣けなかった私が、なぜあの時兄となった冬馬の前で初めて涙を流したのか今でも分からない。

これから家族になる者に対しての大きな愛を感じたからだろうか。本当にそうなのだろうか？

もしかしたらあの瞬間からこうなる運命だったのではないかとさえ思えてくるのだ。

この想いを恋と呼ぶには、あまりに浅はかで身勝手過ぎる。

折れてしまいそうに細く、白い足の爪先から繊細な指の先まで総て支配して、誰の手にも触れさせないように、誰の瞳にも止まらないように守り抜こう。

それがあの全てを焼き尽くすような暑い真夏の日に決めた誓い。

たとえばあの細い腕も、白い肌も、か細い声も自分のものではないと分かっていても、それでも手放せないでいる自分は愚かで仕方なくて。

心のどこかで願ってしまう。

いつか兄と呼ばなくなるその日を。

千子がこの家にやって来たのは、十七の夏だった。

不運の事故で突然両親を失った幼い千子は、自分の両親の葬儀でも涙一つこぼさずただずつと無表情のまま押し黙って、そのまま放っておいたら消えてなくなってしまうのではないのかと思わせるほど、弱々しくそして痛々しかった。

いつも明るかった十も違う妹のような幼なじみの姿は見る影もなかった。

あの絶望と憂いが入り混じったような深い瞳を、一生忘れることはできだろうとあの時思ったのだ。

これから何があってもこの子だけは自分が守っていかなくてはいけない。

それを、単なる同情とこれから家族になる者への愛情だと信じて疑わなかったのに。

一体いつから変わってしまったのか。

もう、今は分からない。

「千子、ビール！冷えてるやつ。」

兄はいつも妹である私を当たり前のようにこき使う。

でもこの当たり前がどことなくすぐつたくて、特別だという優越感をもたらす。

「やだよ！ビールぐらい自分で取りなよ！そろそろ動いとかないと中年太りになるよ。」

「可愛げない妹！」

口ではいくら兄に憎まれ口をたたいてはいても、本当は嬉しい。

そういうふしだらで素直になれない自分は大嫌いであるけれど、そう簡単に可愛げのある女の子になんてなれるわけもない。

それでも、そういう私を兄がそのまま受け入れてくれていることで救われる。

でも、決して兄は私のものではなくてそしてそれは、一生変わることもなくて、ただ単なる一つの揺るぎない事実であるだけなのに。私がこの家にやってきたあの日から、兄はずっと優しい兄であった。実の弟・夏樹と血の繋がらない私を同じように可愛がってくれた。時には声を荒げて怒ることもあったけれど、いつも兄は笑っていた。きつというんなものを犠牲にして、我慢して私たちの面倒をみてくれていたのかもしれない。

それは血の繋がらない私を少しでも悲しませることのないように、気を遣ってくれていたのかもしれない。

ただそれだけのことで、兄にとってはそうしなくてはいけないことで、当然のことだったのだろう。

でも幼い私にとってそれは理解できないことで、愚かにもそれがまるで私だけに向けられる特別なことであるかのように思ってしまった。

何て愚かなんだろう。

そしてあの焼け付くような暑い真夏の日に、何もかもが狂ってしまった。

もう元には戻れない。

「お兄ちゃん。」

妹は当たり前のようにそう呼ぶ。

その言葉がこの心を締め付けていることなど、妹は知る由もないだろう。

「お帰りなさい、お兄ちゃん！今日は早かったね！」

「ただいま。今日は雨で客も少なかったから。」

満面の笑みで出迎える千子は屈託がない。

けれど、その後に見せる一瞬の悲しげな瞳。

それが一体何を意味しているのか。

気付かないうちに、日に日に女へと成長していくその姿が、どうしてもこの胸を急いて仕方がない。

どうしようもない焦りと迷いが心の中を支配してゆく。

けれど妹である千子の中の兄はずっと一生兄のままで、その唇からは「兄」という言葉しか出てはこないのだ。

何度、実の弟と血の繋がらない妹の手を引いて歩いただろう。

千子が寂しくないように。

千子が悲しい思いをしないように。

千子がつらくなってしまうないように。

千子がいつも笑っていられるように。

千子がこの家に来てから全てはそれで、千子が笑ってくれるなら幸せだった。

本物の家族より温かい家族にならなくてはいけない。

何も間違っただけでいいなかった。

千子はいつも明るかったし、いつそんな努力さえ必要ないのではないかと思えるほどだった。

それでも、たまにふと見せる悲寂しげな深い瞳は変わらなかった。

けれど、自分が何かをしてあげることですら千子の心が救われるのなら、何でもしてあげよう。

自分にしてあげられることなら、何でも。

それはただ兄としての妹への優しさでしかなかったはずなのに、何でそれはそのままではくれなかったのだろう。

ただの優しい兄ではいらなかったのだろう。

あの、全てを焼き尽くすような暑い真夏の日に何もかもが狂ってしまった。

もう元には戻れない。

幸せだった、ただの兄と妹でしかなかったあの頃には、もう戻れない……。

高校に入って、初めての夏休み。

料理の勉強のため、海外へ行っていた兄が帰国した。

料理に何の興味も関心も持てない私は、真剣に料理にのめり込んでゆく兄の気持ちなどこれっぽちも分からなかった。

だから三年もの間海外へ行くと突然言い出した時、私は泣いてそれを嫌がった。

ずっと一緒にいた兄と片時も離れたくなかった。

それはそれまでも毎日一緒にいたわけではい。

けれども小学校を卒業したての私にとって、フランスやイタリアという行ったこともない外国は途方もない遠地で、兄が手の届かない処へ行ってしまうような気がしたからだ。

兄はただ少し困ったように笑って、私の頭を撫でながらなだめた。

兄が日本を発ってからしばらくの間、私は毎晩のように泣き通した。兄が近くにいないことが、それだけでとてもなく寂しかった。

けれど、それも次第に消えてゆく。

やっぱり私の想いは単なる兄妹愛だったのだと気付く。

兄の一挙一動に一喜一憂していたのはやはり兄に対しての妹の気持ちなのだ、そう思い込んで三年間を過ごした。

なるべく兄のことを思わないように。

なるべく兄のことを考えないように。

電話越しに話す時にはわざと明るく、何も変わりはないように。

けれども三年後、再会した兄を見た時全ては一瞬で一変する。

料理。

それはこの感覚全てを魅了させ、本気でその道に溺れるようにのめり込んだ。

そうして、日本を飛び出し洋食界の本場・フランスとイタリアに行くことを決めたのだ。

小学校を卒業したての、甘えん坊で兄っ子の千子を残していくことは多少心苦しかった。

けれども、泣いて引き止めようとする千子に笑って告げる。

「三年なんてあっという間。すぐ帰ってくるから。」
何も変わらない。

たった三年なんて、人生のほんの一瞬にすぎない。

また三年後、千子はここで同じ笑顔で笑ってくれるだろう。

「お帰りなさい、お兄ちゃん!」と。

何も変わらない、あの笑顔で…。

けれども三年後、俺は一生分の後悔をする。

第四章 欲望（2）

けれども三年後、再会した兄を見た時全ては一瞬で一変する。

変わらない、低くでもよく通る私の名前を呼ぶ声。

変わらない、優しい笑顔。

変わらない、私の頭を撫でってくれる大きな手。

その何もかもが、三年間しまい込んできた想いを蘇らせる。

十六になった私はほんの少しだけ大人になりつつあって、恋や恋愛というものがどういうことなのか分かり始めていた。

もう、何も知らず兄のことを好きだとか言っていた頃とは違う。

私は兄が好きなのだ。

一人の女として。

妹としてではなく。

なるべく兄のことを考えないようにしなければならなかった程、私は兄が好きだったのだ。

気付いてしまった想い。

だけど、何も変わらない。

この想いは口にしてはいけない。

そして、報われることもない。

だから私は懸命に笑おう。

いつものように。

電話越しのように。

小学生のあの頃ように。

「お帰りなさい、お兄ちゃん！」

けれども三年後、俺は一生分の後悔をする。

再会した千子は、高校の制服であるブレザーと短いスカートに身を

包んで、あの屈託のない笑顔で出迎えた。

三年という年月は、千子を少女から女へと成長させるには十分過ぎた。

時は確実に千子を変え、そこに立っていたのはよく知っている妹の千子ではなかった。

何とか戸惑いを隠して、少しでも昔と変わらないようにその名前を呼ぶ。

ずっと向けてきた笑顔で頭を撫でてやる。

千子の香りさえも、否応なく女を感じさせて決して抱いてはいけない想いが湧き上がってくる。

許されない想い。

許されない感情。

許されない動悸。

何も変わらないなんて、そんなはずはなかったのだ。

けれども、抑えなくてはいけない。

自分は一生、千子の兄でしかないのだ。

千子のためなら押し殺して生きよう。

これまでと同じように。

千子のためならば、どんな感情だって押し込めていよう。

千子がいつも傍で笑っていられるように。

「ただいま、千子。」

第五章 深罪

ミンミンミンミン……

唸るような暑さが身体中にまとわりつく。

暑い真夏のあの日。

千子は学校で行なわれる強制補習の帰りだった。

一緒に帰るはずの夏樹が、馬鹿にも反省文を書かされる羽目になったお陰で、この暑い中長い道程を一人で歩くことになってしまったのだ。

でも、内心少しだけほっとしていた。

その頃千子は、突然夏樹に恋の告白をされたばかりで、きっぱりと断ったものの何か気まずくて家でも学校でもなるべく顔を合わせないようにしていたからだ。

夏樹とは年も同じだったし、常にいつも何をするにも一緒だった。

兄・冬馬とは違って、夏樹はお調子者で明るくて元気なみんなの人氣者だった。

みんなの輪の中で笑う夏樹の隣で、いつも千子も笑っていた。

本当に仲の良い双子同様だった。

少なくとも千子はそう思っていた。

だから夏樹に告白をされても、当然そんな風に思えるはずもなく、むしろ双子風情ではなく夏樹が自分を女として見ていたことがショックでならなかった。

しかし、父や母を心配させないためにそんな感情を顔に出してはならない。

夏樹もそうしているのだ。

そういう風なことを延々と考えながら、千子は家の前に立った。

冬馬は帰国してから、顔を合わさなければいけない人たちや知人たちと毎夜毎晩飲み明かしていた。

昼間は以前働いていた知人の店でヘルプとして入っていたため、実家でゆつくりする暇がなかった。

正直それで良かった。

下手に千子と顔を合わせなくて済むからだ。

三年ぶりに再会してから、千子とどういふ顔でやり取りをすればいいのか分からないのだ。

ずっと笑っていられるはずもないだろう。

何を話せばいいのか。

そうしたことばかり考えていた。

その日急にヘルプの仕事が休みになり、極力避けていたこの家で過ごす羽目になってしまったのだ。

昼頃には夏樹も千子も帰って来るだろうと、母親には告げられていた。

夏樹と三人なら気は楽だ。

そう思うことで冬馬の平常心は保たれていた。

しかし昼過ぎになって帰って来たのは千子だけであった。

「ただいまあー！暑いー！！お母さんアイスー！！」

慌ただしく靴を脱ぎ散らかしてリビングへと駆け込む。

こういうところは三年前とちつとも変わらないかと、冬馬は近づいてくる千子の騒々しい足音を聞きながらふうっとタバコの煙を吐いた。

千子がリビングにドタドタと入り込むとそこに母親の姿はなくて、いるはずのない冬馬が吸いかけのタバコを持ったまま千子を直視していた。

帰国した日空港で冬馬を出迎えた同じ制服で、千子は驚いたように呆けている。

「相変わらず騒々しいな、千子は。」

冬馬が半ば呆れたように言った。

「お兄ちゃん！！帰ってたんだ！今日は仕事遅くなるんじゃないの！？」

千子はそう言つて、嬉しそうに顔をほころばせて満面の笑みを浮かべた。

変わらない笑顔。

変わらない明るい声。

ほんの少しだけ冬馬は安堵感を覚えた。

灰皿の上でタバコの火を消す。

千子も嬉しさを隠せず、はしゃいで冬馬に駆け寄った。

冬馬が日本に帰つて来てから二週間ほど経っていたが、冬馬は二、三度夜に帰つて来ただけで全然顔を見せなかった。

この日も朝から母に、兄の帰りは遅くなると聞いていて千子は内心がっかりしていたのだ。

けれど夜になれば会える。

それだけで嬉しかった。

だからこの時、昼間から冬馬に会えたことがいつもにも増して千子は嬉しかった。

「いや、今日は急に休みになったんだ。団体予約がキャンセルになったらしくてヘルプは用なし。」

冬馬は少しだらけた口調で言った。

千子の明るい声に、ずっと冬馬の心の中でもややもやとくすぶっていたものが薄らいでいく。

何も難しいことはない。

千子が当たり前に接するように、自分も合わせればいいのだ。

冬馬はそう思った。

「そうなんだ！日本に帰つて来てからちっともこっち帰つて来てくれないんだもん。」

千子はぶうつと膨れっ面をしてみせる。

でも本当は千子にとってそんなことどうでもよかった。

三年も会えなかった分、少しでも一目でも会えれば幸せ。

本当はずっとずっと会いたかった。

押し殺してきた気持ち溢れそうになる。

「ごめんごめん、何かと忙しくて。これからはちよくちよく帰って来るよ。」

冬馬は慣れた優しい顔で笑う。

この可愛い千子のためならば、自分の甚だしい忌々しい感情などいくらでも捨ててしまえる。

ただの兄でいられる。

「本当ー!？」

千子は心から嬉しいといった表情で笑って、冬馬の隣にトサツと腰を下ろす。

これからは昔みたいにたくさん会える。

千子は心から嬉しかった。

自分の中にある葛藤の苦しさより、兄の傍に少しでも長く居られる喜びの方が大きかった。

冬馬はまた新しいタバコを取り出して火を点ける。

「じゃあ、私も夏休みだし夏樹も誘って今度のお休みどっか行こう? そうだ! 遊園地とか行きたいな〜!!」

千子が子供のようににはしゃいで騒ぐ。

「こんな真夏に兄妹三人で遊園地!？」

冬馬は思わずうんざり顔になってしまう。

こういう顔の時は本当に嫌なのだ。

久々に見る冬馬の表情一つ一つが千子の胸をときめかせた。

「そっか…夏樹が嫌がるかもなあ。あいつつてば最近家族に付き合い悪いの。きつと反抗期なんだよ!」

千子は、冬馬に真顔を寄せて言う。

「彼女でもできたんじゃないのか?」

冬馬はタバコを噴かしながら素っ気なく答えた。

千子の胸を苦しめるもう一つの悩み。

夏樹のことはどうしよう。

冬馬に言うべきか言わないべきか千子は悩んだ。

「大体お前もだろ、反抗期は！親父とおふくろが嘆いてたぞ、千子ときたら高校に上がってから化粧はするわ、髪は茶色いわ、耳に穴開けるわってな。」

少しカチンとくる。

「それを言うなら夏樹だつて一緒だよ！髪茶色いし、夜は遊びまくって帰って来ないし。家族で食事すら行きたがらないんだから！」

「だから彼女でもできたんだろ。」

冬馬はタバコを灰皿に押しつけた。

「違うもん！あいつに彼女なんかいないもん。」

千子はつんとした顔をして見せる。

冬馬はほんの少しだけ、千子の夏樹に対する違和感を感じたが、さほど気にはしなかった。

「そうか。だったら二人とも同じってわけだな。」

冬馬は足を組んでコーヒーに手を伸ばす。

化粧をしている千子なんて今まで想像もできなかった。

冬馬が持ち上げたグラスの中で、カランと氷が鳴った。

千子は変な衝動にかられた。

もし、夏樹のことを言ってしまったらどうなるだろう…？

お兄ちゃんはどう思う…？

ふと千子は冬馬の横顔を盗み見た。

端正な顔立ちがごくりとグラスに注がれたコーヒーを飲み込む。

冬馬は、千子と普通の会話が成り立っていることに少し安心していった。

昔と同じように接するのは思っていたよりもずっと簡単かもしれない。

水滴が滴るグラスをテーブルに戻す。

冬馬の横顔を見つめながら、千子は思った。

やっぱり変な好奇心は捨てよう。

兄を試すようなことをして何になるだろう。

「何飲んでるの？私も何か飲もう。」

千子は立ち上がってキッチンの冷蔵庫を開けた。

ひんやりとした空気が、夏の火照った顔に当たる。

中から麦茶を取り出してグラスに注ぎながら、千子は何気なく話した。

「夏樹ってばね、今日も反省文書かされてるの！補習のすっごい恐い数学の先生に馬鹿ないたずらしてさ！だからやめとけって注意したのに聞かなかったからこういうことになるんだよ！！」

グラスに注いだ麦茶を一口飲む。

別に、夏樹のことを兄に言ったところで何も変わらないことは分かっている。

「あ！終業式の日もね、全校生徒の前でやらかしたの！何であいつってああなんだろ。」

ならばいつそ夏樹のことも知られず、昔みたいに三人で笑い合いたい。

だって、どんなに望んでも想っても兄とは結ばれない。

千子はわざと阿呆のように、できるだけひょうきんに夏樹のことを話した。

「そう言えばこないだも夏樹がね！」

楽しそうに夏樹の話をする千子を冬馬はじっと見つめた。

「千、夏樹のことが好きなのか？」

思わず冬馬の口について出てしまった言葉だった。

千子は呆然とした。

思いもよらないことを冬馬が急に口にしたので、何の話をしていたのかさえ頭から飛んでしまった。

と言うより一瞬何を言われたのか、よく理解することができなかった。

千子の持っているグラスの中で、溶けた氷がカランと音を立てる。

「誰が誰を？」

千子は不思議そうな顔をして冬馬を見つめた。

「千子が夏樹を。」

何を突然言い出すのだろうか？

千子は思わず叫んだ。

「何言ってるの？！そりゃ血は繋がってないけど兄妹だし、双子みたいなもんだよ？」

「そうか。」

冬馬は持つているグラスを口に運んだ。

「変なお兄ちゃん！」

そして、千子ももう一口麦茶を口に含んでから麦茶の入ったピッチャーを冷蔵庫にしまった。

しばらく、二人とも沈黙した。

自分は何を言っているのか。

冬馬は一瞬、まるで弟の夏樹にまで嫉妬をしているような感覚に襲われたのだ。

心の奥底からもやもやとしたあの感情が蘇ってきそうで、冬馬はそれ以上何も言わなかった。

重い沈黙の間に、外から聞こえる蝉の声だけがやたら大きく響いてくる。

その重苦しい空気が千子の理性を一瞬狂わせた。

「嘘。夏樹が好きだって、私のこと。」

千子はぼそりと呟いた。

その言葉に思わず冬馬は頭を上げた。

冬馬の反応を見るのが恐くて、千子は後ろを振り返らずそのまま話を続けた。

「でも、私は夏樹のことをそんな風にはどうしても思えなくて、夏樹の気持ちに答えることができなかったの。だからなのかもしれない、最近ずっと夏樹が家族と居たがらない理由。家族じゃなくて私を避けているのかもしれない。」

言ってしまったから、心の中とは裏腹に苦笑して見せた。

冬馬は何も言うことができずに押し黙った。

言いようのない嫉妬感と焦りがふつつと心の中を蝕んでいく。

「こんなことお兄ちゃんに言うもんじゃないね。夏樹には言わないで。」

ふっと一瞬千子の顔から全ての表情が消え失せて、その目が生気を失くして遠くを見つめた。

「だって私にも好きな人がいるの。」

もう理性を失っていたのかもしれない。

考えるよりも先に口が動いていた。

「もうずっと長いこと片想いで、多分一生叶うこともないんだけど。」

そこまで言って千子のはつと我に返った。

さすがにその人が今目の前にいる兄だなんて、言えるはずがなかった。

私の好きな人は兄だと、言ってしまったたらどんなに楽だろう。

一瞬でも、言って想いが叶ったらどんなにいいだろう。

不毛な片想いは、願いだけが虚しく肩にのしかかる。冬馬は何も言わず、ただ黙って聞いていた。

今にも暴れ出してしまいそうな狂気染みた感情を、必死に理性で治めながら。

誰にも千子を渡したくない。

たとえ実の弟であっても、千子には触れさせたくない。

むしろ弟であるがゆえに、なおさら許しがたい。

その想いが一体どんな愛なのか分からないまま、それでも千子を自分のものにしてしまいたい。

欲求や欲望というより、千子がいつか自分の元から離れていったしまうことがどうにも恐くてならなかった。

必死に繋ぎ留める理性が少しずつ崩れ落ちてゆく。

この理性を全て失った時、取り返しのつかない傷を千子に負わせてしまっだろう。

それでも、千子を繋ぎ留めておけるのならば？

冬馬の中で何かが音を立てて崩れ去った。

千子は再度の沈黙に耐えかねて、おちゃらけたように言った。

「あ！好きな人って言ってもそんなに大袈裟なことじゃなくてね！ちよつとした懂れって言うかさ、そんな真剣にする話でもないから。」

千子はくるりと振り返って笑った。

これでいいのだ。

こうやっていれば兄も笑って馬鹿にして終わる。

いつものように呆れたように笑って終わるだろう。

千子がそう思つて一瞬うつむいた瞬間、急に千子の顔が影った。

目の前に大きな気配を感じて顔を上げようとすると、冬馬の大きな手が千子の腕を掴んでいた。

今までこんな風に掴まれたことがあつただろうかと思うほど、強い力だった。

何かが千子の中で叫ぶ。

逃げろと。

よくは分からなかったが、何か体の奥底に潜んだものが懸命に叫んでくる。

本能とでもいうのだろうか、そういつたものが千子の全身全霊に呼び掛けていた。

危険だと、何かが違つと懸命に訴えている。

冬馬は一瞬ためらつたように視線を下げてから、ゆっくりと目を上げた。

その目に、もう何も迷いは見えなかった。

今までに見たことのないほど、真剣で深い冬馬の眼差しに千子は言しようのない恐怖を覚えた。

まるで何か目には見えない針金のようなものが体中無数に絡み付いて、縛り付けられているような錯覚に陥る。

千子の心と身体をその場に縫い付けてしまつかのような冬馬の強い視線。

そのまま食い込んでしまうかのような掴んだ手の熱さ。一步も動けない、と千子は固まった。

「俺のこと好きか？」

茫然としたように、でもしつかりとした声で冬馬が聞いた。

その言葉の意味をどう理解すべきだったのか。

千子はわけが分からず混乱した。

「何を言っているの？ 今日のお兄ちゃんさっきから変だよ。急にそんなこと言い出して。」

千子は冬馬から目をそらして言ったが、冬馬は微動だにせず表情一つ変えない。

それがまた嫌というほど、いつもの違いを感じさせて言いようのない不安を千子の胸に募らせる。

「千子、俺のこと好きか？」

冬馬がもう一度聞いた。

どうしてそんなことを、そんな真剣な瞳で聞くの？

千子はうつむいてぼそりと答えた。

「好きだよ……。」

理由はそれだけで十分だった。

冬馬はその瞬間何かがこと切れたように、千子の腕を掴んだままりピングを出た。

千子の腕を掴む冬馬の手がさらに強くなる。

怖い。

千子の中に潜む女の本能がそう言った。

無理矢理階段を引きずられるように登りながら、必死にもがいて逃れようとした。

「なに?! どうしたの? どこ行くの? 痛いよ! 離して、お兄ちゃん!」

しかし冬馬の握る手はあまりにも強くとても千子には振りほどけない。

何も言わないその大きな背中が、まるで知らない男の人のように見えてどうしようもない恐怖を感じる。

何かが違う。

何かがおかしい。

冬馬は千子が無理矢理引つ張つて階段を登り終えると、千子連れのまま自分の部屋へと入った。

殺風景な部屋には、机と黒いシートで覆われたベッドしかない。

三年前日本を発ったあの頃のままだ。

冬馬は、部屋に入るなり千子をベッドへ投げ出した。

そして、後ろ手で部屋の戸を閉める。

カタンと戸を閉める音と、カチャリと部屋の鍵をかける音が静かに響いた。

千子の胸が激しく脈を打つ。

息もできないほどの動悸が全身を支配して、今まで感じたことのない恐怖が千子の体中を包んでいく。

早く。

早くこの場から逃げなければ、とんでもないことが起きようとしている。

千子の本能がざわざわと騒ぎ立てた。

刺すような冬馬の視線に、千子の足も手も身体中が凍り付いたように動かない。

怖い。

その言葉しか浮かんではこない。

千子は首を横に振った。

しかしどんなに千子が怯えても、一步また一步と近づいてくる冬馬の足は止まらない。

「いや。」

千子はまた首を振った。

怖い。

何をするの？

お兄ちゃん…

「いやだ！」

千子は精一杯の声で呟くように叫んだ。
それから何度も何度も首を横に振った。

冬馬の足は止まらない。

「こんなのはいやだ。」

何で？

どうして？

千子の目に涙が溢れ出した。

女としてなんか見てくれないくせに。

けれど千子の声など何一つ聞こえてはいないかのように、冬馬は怯える千子の前まで来ると何も言わずにその頬に触れた。

震える頬に涙が伝う。

それから冬馬の手は、千子の制服のリボンにかかる。

ほどけたリボンが、はらりと冷たい床の上に落ちた。

それは独占欲？

ただの支配欲と征服欲だけで私に触れるの？

誰にでもそんなに優しい手で触れるの？

女として愛することなどできないくせに。

決して好きだとも言わないその唇で私に触れるの？

ねえ、触れるの？

冬馬が足をかけると、ギシリとベッドが軋んだ。

千子の足も手も何もかもがガクガクと震えて力が入らない。

もう一度ベッドがギシリと軋んで、冬馬の身体が千子を覆った。

そして千子の白く細い足の爪先から、その熱く大きな手がその指がそつと伝って静かに這う。

唸るような暑さが身体中にまわりつく、真夏のあの日。

外から聞こえる蝉の声だけがやたら大きく響いていたあの日。

私たちは罪を犯す。

幸せなはずだったのに何をどこで間違えてしまったのだろうか……？

第六章 情事

何で？

何で？

何で？

同じ言葉だけが頭の中をぐるぐると回って、涙が止まらなかった。男の力にはかなわない。

けれども初めて触れるその手は優しく、壊れものに触れるようなそんな指先を今も忘れることはできない。

どういつつもりでこんなことをするのか？

お兄ちゃん。

あなたが私を女にするの…？

この瞬間だけは私を女として扱ってくれるの…？

「千子。」

その低く、よく通る声が優しくその名前を紡ぐの…？

溢れた涙が恐怖からだったのか、それともと別の感情からだったのかは分からない。

ただ一つ分かることは、もう今まで通りではいけないこと。

今まで通りの兄と妹ではいられない。

全てのことが終わってから、冬馬は何も言わずに優しく千子を抱き締めただけだった。

「大嫌い！お兄ちゃんなんて世界で一番大嫌い！！」

千子はそう言い放って泣きながら冬馬のその大きな胸を突き飛ばすと、ベッドの下に散らばった制服を拾った。

その言葉が冬馬の胸に突き刺さる。

「もう顔も見たくない。」

千子はぼそりと呟いて部屋を飛び出した。

後悔の念が冬馬を押し潰そうとする。

千子に嫌われることが、こんなにもつらいことだとは思わなかった。

千子を失ってしまうことよりつらいのではないかと冬馬には思えた。それも全て覚悟していたはずであったのに。

けれど、もう後には引けない。

冬馬は静かに瞳を閉じた。

ああ。

私はこれからどうしたらいいのだろう…？

千子は自分の部屋に入ってベッドに潜り込んだ。

こんなことになるのなら、いつそ兄を好きだという気持ちにさえ気付かなければよかった。

そしたら、ただ兄を恨んで憎んでしまえたのに。

千子は声を殺して泣いた。

ほんの少しだけ、心のどこかではこうなることを望んでいたのかもしれない。

けれど、こんな形で実現してしまうなんて夢にも思っていなかった。必死に抵抗しながらも、女として扱うその手を憎んでしまいきれない自分を千子は恨んだ。

しばらくして夏樹が帰って来たようだった。

リビングにもいない千子と冬馬を不思議に思つて、夏樹は千子の部屋を訪れたがベッドの中の千子を見て寝てしまったのかと何も聞かなかった。

夏樹が帰って来て少しすると冬馬は静かに家を出た。

その気配を感じてはいたが、ぼうつと思考回路を絶たれ始めた千子にはどうする気にもなれなかった。

今兄は何を思っているのだろう…？

ただそれだけがうつすらと千子の頭の中をかすめていた。

冬馬は静かに家の戸を閉めた。

なぜ夏樹が帰って来るまで待てなかったのだろう。

そしたらいくらでも理性を働かせることはできただろう。

もう何をいくら思っても、後悔の重みは増すばかりで何の慰めにもならなかった。

千子を愛しいと思うことには変わらないのに、これから千子の気持ち
ちは離れていくばかりなのだろう。

そう思うと虚しさと空虚感が込み上げてくる。
しばらく一人になりたかった。

千子に避けられる苦しさから逃れたかったただけかもしれない。

車にキーを差し込みエンジンをかける。

アクセルをそつと踏み込んで車を発進させた。

これから見える景色がどうこの目に映るだろう。

きつと色褪せた景色が待っているのだろう。

そしてそれは千子の胸にも募っていくのだろう。

きつと永遠に…

千子は一生自分を憎み続けるだろうと、冬馬は確信ある絶望と罪を
胸に刻み込んだ。

冬馬はアクセルを踏む足を強めた。

それから冬馬は三日、家には戻らなかった。

仕事だと母からは聞かされていたが、千子は兄が家に帰らない理由
がとてもそれだけだとは思えなかった。

きつと自分を避けているに違いなかった。

千子は授業に集中などできるはずもなく、ぼうつと補習を受けてい
た。

夏樹はと言えば、千子の変化に気付くはずもなくいつもと変わらず
騒いで先生に睨まれている。

はあと千子は小さく溜め息をついた。

兄の気持ちも、そして自分の気持ちさえも分からない。

兄はこのまま帰らないつもりだろうか？

兄に会いたいわけではなかった。

ただ今兄が何を思い、何を考えているのか知リたかった。

このまま二度と私とは顔を合わせないつもりだろうか？

「千子！夏樹は今日も居残り？」

補習が終わり、風に深緑の木々が揺れる中を校門に向かってぼんや

りと歩く千子を友達の声が呼び止めた。

「そう。今日も反省文。」

振り返って答えた千子の声は決して明るくはなかった。

「夏樹も懲りないね。それにしてもここ数日千子元気ないよ。何かあったの？よかったら気晴らしにみんなでカラオケにでも行こうよ！」

心配そうに顔を覗き込む友達から思わず千子は目を反らす。

何があったのかなんて言えるはずはない。

「うん。」

言葉少なに返事だけを返した。

とてもそんな気にはなれなかったが、それでほんの少しでも気分が紛れるのならそれもいいと千子は思った。

兄にはもう二度と口をきいてもらえないのかもしれない。

もう顔も見たくないと言ったのは自分なのだ。

世界で一番嫌いだと言い放ったのは自分の方なのだ。

「よかった！それでこそ千子だよ！！じゃあ行こう！後で夏樹も合流するから！」

乗り気の友達に腕を引かれ歩き出す千子。

だからあの時、校門の所に黒い愛車を停めて待ち伏せをしている兄を見付けた時は、何とも言えない喜びや嬉しさにも似た感情が溢れてどうしようもなく溢れて仕方がなかったのだ。

「あれ！校門の所に誰がいるよ。誰かの彼氏かな？」

歩き出した友達が急に止まったので千子はずんのめってしまった。

ゆっくりと顔を上げた千子の目に映ったのは、見慣れた黒い冬馬の愛車と下を向いてタバコに火をつける冬馬の姿だった。

千子は申し訳なく友達に頭を下げた。

「ごめん！うちのお兄ちゃんなんだ！今日迎えに来てもらう約束してたんだ！ごめん、行くね！！」

驚く友達をその場に残して千子は駆け出した。

兄に会いたいわけではなかった。

会いたいわけではなかったはずなのに。

この三日、冬馬は仕事に没頭した。

余計なことを一切考えずにいいように。

全てを忘れることなどできなかったが、ほんの少し落ち着きを取り戻すには充分だった。

確かにこのまま逃げてしまうことも考えた。

けれども逃げてしまうことは自分の罪を助長させるだけで、千子にもっとつらく深い苦しみを与えてしまうことになるだけだ。この場に足を運んだのだ。

許されるなんて思っではいけない。

ただそれでも伝えなければいけないことがある。

冬馬はタバコを口にくわえた。

千子は、下を向いて静かにタバコを吸う冬馬の前に立った。

冬馬の足元には何本ものタバコの吸い殻が落ちていた。

冬馬も視界に入り込んだ千子の靴先に気付いたが、すぐには顔を上げることができなかった。

「何しに来たの!？」

千子は足元に散らばる吸い殻を見つめて無愛想に言った。

そう聞かれてやっと冬馬は顔を上げることができた。

冬馬は静かに顔を上げて、ふっと優しく笑った。

強気な千子の瞳が一瞬潤んだ。

冬馬のいつもと変わらない優しい笑顔に思わず涙が溢れそうになって、千子はさらにもっと頭を下げて目を反らした。

「もう口利いてもらえないかと思った。」

冬馬は力なく笑いながら言った。

「当たり前じゃない。お兄ちゃんこそ家にも帰らないで。」

千子は下を向いたまま呟いた。

「ごめん。忙しかったんだ。」

冬馬は困ったように口だけで笑う。

嘘つき。

千子は唇を噛み締めた。

なぜ涙が出るのか分からなかった。ただ握り締めた拳が震えて、今にも涙がこぼれてしまいそうだった。

うつむきその小さな体を震わせながら口をつぐむ千子を、冬馬は少し寂しそうに見つめてから言った。

「随分、俺は嫌われたな。」

そしてまた千子は口にしてしまう。

「そうよ。お兄ちゃんなんて嫌い。大嫌い！絶対にもう二度と好きになんてなつてあげない！」

溢れる涙と一緒にこぼれるその言葉を冬馬はまた寂しそうに笑って受け取った。

感覚が麻痺してしまったかのように、冬馬はもうさほど苦しくはなかった。

こう言われることは分かっていたのだ。

冬馬は千子を車に促した。

「さあ、帰ろう。」

千子を助手席に座らせて、冬馬も運転席に納まった。

エンジンをかけようとキーを差し込む冬馬の手を、千子はそっと押さえて遮った。

振り返る冬馬の顔を見つめて千子は静かに言い放つ。

「ホテルに行つて。」

冬馬は耳を疑った。

「家じゃなくてホテルに向かつて。あんな思い出なんて嫌なの。取り消せないのなら、もう一度やりなおしたいの。」

冬馬は千子を見つめたままもう何も言わなかった。

私の犯した罪。

そして私はまた兄の胸に抱かれる。

決して誰にも知られてはいけない情事の幕が上がる。

報われない想いの先に何があっても、緩やかに流れる時間の中では

男と女でいたい。

その願いだけはきつと変わらない。

千子はそう思った。

たとえ、決して愛されなくても。

第七章 時間（前書き）

時は罪を浄化することなくただ降り積もる。

それは千子の肩にも、冬馬の肩にも絶え間なく降り注ぐ。

第七章 時間

千子はまだ十六だったんだと冬馬は思った。

軌道に乗り始めて一年以上が経過した自分の店の前に立った。

閉店間際の店内にはもうまばらにしか客の姿はない。

厨房のいらぬ段ボールを捨てに来て、そのまましばらくぼうつと冬馬は突っ立っていた。

あれから七年……と冬馬は遠い目をした。

どうしても離れることのできない千子のことを思った。

あの日、車に乗り込んだ千子は自らこの手を引いたのだ。

それを振り切ることができていれば、もっと違う未来があったのかもしれない。

あの日から幾度となく後悔してきたことだった。

あの日から千子を妹だなんて思ったことは一度もなかった。

一度も。

けれど、そろそろ手放さなければいけない。

千子の未来までも奪うことはもう許されない。

根拠のない潮時を冬馬は感じていた。

捕らえてしまった蜘蛛は脆弱な心でその美しさと大空舞う姿に欲望を馳せて手を伸ばしてしまった。

二度と自由を与えられない自分の愚かさに気付かないまま、絡み付いた糸は解けず深く深く食い込んでいくだけ……。

「沢田さん！後片付け始めますよ？」

ぼうつとしている冬馬に店内からスタッフが呼び掛けた。

涼しくなり始めた夜風がやけに冷たかった。

カッソカッソとヒールを鳴らして、千子は一人夜道を歩いた。

向かうのは、一年と少し前にオープンしたばかりの洋食店。残業明けのその足で向かうのは空腹のためではない。

そこには誰よりも会いたい人がいる。

千子はまだ真新しさの残る、ヨーロッパ風にデザインされたお洒落な店舗の前に立った。

千子はこの場所が好きだった。

冬馬の働く姿は何とも言えず千子の女心をくすぐった。

千子は笑みを浮かべて、カランと店の厚い扉を押した。

「すいません、もうラストオーダー終わっただんです。」

とキッチンから顔を覗かせてホールの子が申し訳なさそうに声をかけた。

「こんばんは。」

千子が微笑みかけると女の子はキッチンから出て来て嬉しそうに笑顔を見せた。

「千子ちゃん！いらっしやい。沢田さんでしょ？もう少しで中も片付け終わるからちょっと座って待ってて。」

「はい。」

千子は一番キッチンに近い席に座った。

そこからは窓越しにほんの少し、キッチンの様子が見てとれるからだ。

千子は頬杖を付いて中の様子を見つめた。

知らず知らずのうちに顔がほころぶ。

目が追うのはもちろん兄・冬馬で、その一挙一動、指の先の動きに至るまで見逃すまいと自然に視線が動いてしまう。

千子は冬馬の包丁を扱う手の先をじっと見つめた。

包丁を扱うその繊細な手が、その長い指がそっと私に触れる。

それと思うだけで体が熱を帯びたように熱くなってしまう。

そうしてどうしようもなく甘い蜜は溢れてしまつて、どんどんりとめを失くしていく。

「相変わらずお兄ちゃんっ子なのね。」

さっきの女の子がとすと千子の向かいに座った。

千子は思わず、慌てたように顔を上げた。

「はい！コーヒーでよかった？」

温かい缶コーヒーをコトンと千子の前に置いた。

「あ、どうもありがとうございます。」

千子がお礼を言うと彼女はにこりと笑った。

「ホールは片付け終わったからあとはキッチン待ちなの。」

「相変わらず忙しいですか？」

「オープンしたての頃に比べたらだいぶ落ち着いたけど、それでも忙しいわよ。」

彼女は苦笑して見せた。

この店がオープンした頃、学生だった千子はアルバイトとしてこの店で働いていたのだ。

彼女はその頃一緒にホールで働いていた先輩で、千子が店を辞めたあともちよくちよく店に遊びに来るよう誘ったのは彼女だった。

「このボスが厳しいからね！気疲れもあるかな。」

あははと千子は笑ってしまった。

「兄は、信頼を置く人にこそ厳しいんです。」

「そお？それにしたら千子ちゃんには優しすぎなんじゃない？この妹にあの兄ありって感じね。沢田さん千子ちゃんには甘いんだから！」

ぷりぷりと言ってから彼女はまた笑って見せた。

千子も笑った。

自分にだけ優しいと言われたことがほんの少しだけくすぐったかった。

「キッチンも終わったぞ。」

笑い合う二人の横に冬馬が立った。

「はい！帰ります！」

冬馬に言われて彼女は立ち上がった。

「沢田さん、たまには千子ちゃんだけじゃなくて私たちにも優しくし

てくださいよ。」

冬馬に耳打ちするように彼女が笑った。

「俺はいつも優しいだろが！」

冬馬がしかめっ面をして見せた。

「ほらまたそんな顔をする！じゃあお疲れさまです、また明日！兄妹仲良く帰って下さいね。」

そう言つて彼女は千子に手を振つて、他のキッチンのスタッフ達と店を出て行つた。

「今日は仕事遅かったな。」

「うん。残業終わつたら、ちょうど着く頃に店終わる時間だなつて思つて。」

「そっか。」

「うん。」

白いコックコートに白いサロンのまま冬馬が優しく笑う。

「で、悪いんだけど今からちょっと魚だけ引いてもいい？それだけしときたいんだけど先帰つとくか？」

「ううん、待つてる！お兄ちゃんどこ寄ってくるって家にも連絡したし大丈夫！」

にこりと言つた千子に冬馬もふつと笑つた。

「本当仲良いわよね、あの兄妹。私なんて三つ上の兄と仲悪いからうたらやましい。」

店の外でこれから飲みに行く話題で盛り上がりながら、ホールの彼女が呟いた。

目線の先には窓越しに見える千子と冬馬の笑い合う姿が映っていた。

「本当仲良いよな。」

他のスタッフも笑つて同意する中、一人だけぼそりと意見を違えた。「そうかな。俺には兄妹というより男と女に見えるんだけどな。」

「もう、また副料理長は勘ぐりすぎですよ！ささ飲み行きましょ！」
みんなが歩き出す中、副料理長と呼ばれた彼は窓越しに見える二人の姿をもう一度しばらく見つめてから歩き出した。

ガシャンと鈍い音がしてコーヒークップの缶が落ちた。

もうとつくに冷めてしまったコーヒークップがばしゃりと床に散らばった。

「あ、コーヒークップが……」

一番端のテーブルの上に横たわる千子の目線の先で、空の缶がカラカラと転がった。

「いいよ、後で拭けばいいから。」

缶を見つめる千子の言葉を冬馬の声が遮った。

黒いカーテンで閉められた店内は淡い間接照明だけが灯され、ほの暗く涼しい。

冬馬の唇が千子の首筋にそつと触れた。

千子の体が一瞬ビクンと反応して、千子のかすかな声が漏れた。

冬馬の足が千子の膝を割って、その手が千子の太ももを這いながらするするとワンピースをたくし上げる。

さつきまで包丁を繊細に扱っていた指先がこの体をそつと這う。

そう想像するだけで千子の体は熱くなり、頭までおかしくなりそうだった。

誰もいなくなった店内は物音一つせず、二人の息遣いだけが響く。いつまでこうやって抱き合っていていられるのだろうか。

千子は急に不安になった。

兄はいつまでもこんな関係が続けられると思っているのだろうか。

終わりはあるのだろうか。

冬馬が急にすつと手を千子から離れた。

「魚臭い。」

冬馬が自分の手を嗅いでから顔をしかめて見せた。

甘い空気が一瞬で崩れてしまったので、千子は思わず笑ってしまった。

「魚引いた後、ちゃんと手洗ったんだけどな。」

「石鹸で？」

千子は笑いながら聞いた。

「当たり前だろ。」

冬馬はさらに顔をしかめた。

「いいよ。私は構わないから…」

千子は冬馬の首に手を回した。

手放してしまわなければいけないと思うのに、触れずにはいられない。

首に絡み付く千子の腕がまた冬馬の理性を狂わせる。

熱くなった体がただひたすら千子を求めた。

次から次に襲い来る快楽の波に、千子は身を任せるだけだった。

「思ったより遅くなったな。」

ハンドルを握る冬馬がぼそりと言った。

「うん。」

千子が腕時計に目をやると、とつくに午前零時を回っていた。

「店の片付けを手伝わされたとしても、言っておけばいいよ。」

冬馬は正面を向いたまま笑った。

「うん…。」

けれども千子は顔だけで笑って返すだけだった。

千子はいつもこの帰りの道程が嫌いだった。

家に近付くたびに幸せな夢から覚めていくようで、どうにもやるせなかった。

家に一步でも入れば、完全に夢の時間は終わってしまう。

そしてその後でどうしようもない虚しさが込み上げてくるのだ。

それは何度感じても耐えがたい苦痛で、一生慣れることなどないと千子は確信していた。

慣れるどころか悪化するばかりだと、千子は流れる夜の景色を見つめた。

「ただいま。」

声を上げて先に玄関に入った千子の視界に、見慣れない真っ赤なハイヒールが入り込んだ。

このサアと一瞬で現実に引き戻されるような感覚は、一段とたまらなく虚しい。

「千子ちゃん、お帰りなさい！」

透き通るような声の主に千子は無愛想に答える。

「ただいま。」

靴を脱ぐ千子の後ろで家の扉が開いて、車を停めた冬馬が入ってくる。

「お帰りなさい、冬馬。」

いささか冬馬も驚いた様子で妻の顔を見つめた。

「ただいま、今日は帰れないんじゃないのか？」

「うん、撮影のスケジュールが変わっちゃってね！今日出番少ないから帰って来ちゃった。」

背中夫婦の会話を聞きながら、何とも言えない不快感に千子は包まれた。

千子はそそくさと靴を脱いで家にかかる。

「あら、お帰り。あんたたちえらく遅かったわね。」

台所から顔を出して母親が言った。

「うん。店の片付けさせられてたから。」

思わず八つ当たりめいた口調で千子は答える。

「そう。じゃあ後でお兄ちゃんに給料でも請求しなさいよ。夕飯は？」

母親は冗談を言って笑いながら千子に聞いた。

「先にシャワー浴びてくる。お兄ちゃんに先食べといてって伝えて。」

つんけんどんな態度で母親に告げてから浴室へと続く廊下を歩く。

その母親と千子のやり取りを見て、美夜は少し落胆したような顔を見せた。

「本当にごめんなさいね、美夜さん。あの子っいたらいつまであなのかしら。ただのヤキモチだから気にしないでちょうだいね。」

母親は一早くその様子に気付いて慌てて声をかける。

「あ、いえ！私なら大丈夫ですから、お気になさらず。」

「そんな話やめろよ、お袋。先に飯食うから。」

二人の会話を少し強い口調で遮ってから、冬馬はキッチンへと入った。

「はいはい、もう夜遅いんだから早く食べてしまっってちょうだいね。」

「母親がその後に続いてキッチンに入ってから、一人玄関で美夜は小さな溜め息をついた。」

すたすたと廊下を歩きながら、千子は自分の行動の幼稚さにイライラとしていた。

お母さんに当たっても仕方がない。

そんなことは分かっている。

だけど、どうしても美夜さんを素直に受け入れることはできない。兄と美夜さんが笑い合う姿など見たくもない。

ましてや、さつきまで兄の体温をこの肌で感じていたこんな夜は涙が溢れそうになって、誰にも見られまいと歩く速度が上がる。

しかし、やっと浴室の戸に手がかかると思った瞬間千子の背で低い声が呼び止める。

「またこんな時間まで兄貴と会ってたのか。」

廊下の壁に寄り掛かる夏樹が冷たく言った。

「店の後片付け手伝ってただけよ。」

「お前が必要なほど人足りてないのかよ。」

夏樹が溜め息混じりに千子に言い放った。

「知らないわよ！夏樹には関係ないでしょ、もうほつといて！」

思わず叫んで、千子は浴室に入り荒々しく戸を閉めた。

もう何もかもが嫌だと、千子は着ていたものを脱ぎ捨てた。閉ざされた浴室の戸の外で、夏樹は大きく溜め息をついた。

？

第八章 熱情（１）～夏樹～

夏樹は静かに階段を下り立った。

階段を下りながら見えるリビングでは、千子が静かにコーヒーを飲みながら新聞に目を通していている。

いつも夏樹は決まって、人知れず溜め息をつくしかない。

千子がこの家の養子になっても、夏樹にとって千子は幼なじみで、好きな女の子に変わりなかった。

けれど千子にとって自分はただの幼なじみで、きつと男としてすら見てはいないのだろう。

夏樹はまた一つ溜め息をついてからリビングに足を踏み込んだ。

「おはよう！」

夏樹はいつものテンションを何とか保って声をかけたが、昨夜の気まずい空気はまだ続いていていつものように会話が成り立たない。

「おはよう……！」

振り返り、笑って言う千子には何の曇りもなかったが、無理をしているのだろうそれ以上言葉は出なかった。

夏樹は黙ってキッチンに立った。

コーヒーをカップに注ぎながらそ知らぬ顔で言う。

「兄貴は？」

少し濃いめのコーヒーがいつもより苦く感じられた。

「知らない。お店じゃないの？それより昨日はごめんね、私すごくイライラしててあたってしまっ……」

千子は読みかけの新聞を閉じてぼそりと言った。

夏樹は、千子から昨夜の話題について触れてくれたのでほんの少しだけほっとした。

「まあそんな日もあるだろ！あんな時間まで兄貴に店の手伝いさせられちゃな！どうせ電話で呼び出されたんだろ？」

千子は何も言わずに押し黙った。

「いいよ！兄貴もお前には甘いからな。」

「甘いんじゃないくて都合よく使ってるだけよ。」

千子が思ったよりも機嫌悪げに言ったので、夏樹は言葉に詰まってしまった。

「それは…そうかもしれないけど、それに千子も答えるからだろ。」正直な気持ちだった。

千子の兄に対する気持ちは一体何なのか。ずっとはつきりさせたかった。

千子はバツが悪そうに一口コーヒを飲んだ。

その通りなのだと、千子は何も言い返せなかった。

「…なあ、千子。一度聞いてみたかったんだ。」

夏樹はそう言って、ソファに座る千子の隣に腰を下ろした。

「俺はさ、知っているだろうけど千子のことを妹だなんて思えないんだ。」

千子は顔を上げずにソーサーの上の茶色い水面を見つめていた。

「ただの男と女でありたいと昔から思ってきたし、これからもそれは変わらないと思う。」

しばらく沈黙が続いた。

そんなことはとうの昔から知っていたが、改めて言われるとどう返しているのか分からない。

千子はますます押し黙った。

「千子が、俺のことを昔から男として見ていないことはよく分かっているよ。けどさ、これ見よがしに兄貴と仲良くしているのを見るのはやっぱり辛い。」

夏樹は一瞬遠い目をしてから、目線を落とした。

「これ見よがしなんて、思ってたないよ。」

そう言ってから千子はなぜか泣きそうだった。

これ見よがしなんてつもりはない。

私だって必死なのだと言ってしまいたい。

だけど夏樹の私に対する苦しい想いも、私が兄に対する苦しい想い

も同じなのだ。と千子は思ったのだ。

報われないと分かっているにしても、気持ちは加速する一方ではない。そんな虚しい愛し方しかできない私たちはよく似ているのだ。

「千子がそんなつもりじゃないことは分かっているよ。」

笑って言ったが、夏樹はほんの少しだけ後悔していた。

千子の気持ちは分かっていたはずであったが、実際今ここではつきりと言われるのは辛いものがある。と夏樹は思った。

けれど、はつきりさせなくてはならないことがある。

「一つだけはつきりさせて欲しい。俺は千子が好きだから、千子に本当に心から好きな男がきたら心から祝福してあげたいと思ってるし、叶わないなら影で身を引くのも愛だと思っただ。」

千子の胸にぐさりと夏樹の言葉が突き刺さる。

どうしようもなく夏樹を裏切っているような感覚が千子を覆って、いたたまれなくなる。

「ただ、それが兄貴じゃなければ誰だって俺は受け入れられる。」

夏樹の言葉は千子に追い打ちをかけた。

「なあ千子、お前にとって兄貴って何なんだ？」

そう口から出たあとで、夏樹の心臓は張り裂けそうだった。

千子を諦めようと思ったことは幾度となくあった。

けれども諦めがつかなかったのは、兄貴の存在があったからだ。双子のように生活してきた自分を、千子が恋愛対象として見れないことは納得できる。

けれども千子の兄貴に対する目は、たまにただの妹ではなく、一人の女になっているような気がしてならない。

千子に対するこの想いだけは、兄貴でさえ勝てない。

兄貴にだけは譲れない。

兄貴にだけは…

どくんどくと、胸の音が脈打つように千子の頭の中まで響いてくる。

「正直に答えて欲しい。」

夏樹の真剣な顔を見ることができないまま千子は答えた。

「…お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ。」

かすかにその語尾が震えたのを、夏樹は見逃さなかった。

しかしあえて何も言わなかった。

「だよな。変なこと聞いてごめんな。さて！顔でも洗ってくるか！」

立ち上がった夏樹を見て、千子は思わずほっと胸を撫で下ろした。

まだ誰にも知られるわけにはいかない。

千子は小さく頷いた。

リビングを出る夏樹の顔が陰しく変わる。

半端な気持ちで千子のことを想ってきたわけじゃない。

嘘が現実になる時、正常だった歯車が狂い出す。

「兄貴にだけは譲れない。」

夏樹は洗面所には向かわず二階へと駆け上がった。

？

第八章 熱情（2）〜美夜〜（前書き）

ひら、ひらりと蝶の羽根は一枚、また一枚と舞い落ちて、それを拾うのは誰でもなく一ひらの風に過ぎないことを誰が知るだろう。落とした羽根の美しさは、誰にも気付かれず消えていくだけなのか。

第八章 熱情（２）～美夜～

「…ん…」

思わず漏れた声に、美夜はすかさず自らの口を押さえた。

仕事中心の美夜にとってプライベートな時間は貴重だった。

その貴重な時間の大部分を埋めるのが、愛する夫・冬馬と過ごす時間である。

生涯掛けての夢だった仕事を手に入れても、女としての自分も愛しい。

そんなわがままな自分を受け入れ、認め、愛してくれる夫は彼しかない。

美夜にとって冬馬は癒しそのものだった。

「今日は何でそんなに激しいの？」

美夜はクスリと笑った。

「久しぶりだから…？」

冬馬は何も言わずに美夜から身体を離れた。

「今日ね、子役の子と一緒にだったんだけど、子供って本当可愛いのね。」

「子供は嫌いだったんじゃないのか？」

冬馬はベッドの端に座ってタバコに火を点ける。

「嫌いじゃないのよ。ただまだ自分の子はもちたくないってだけでまだ仕事だけに集中してたいの。」

美夜は長いウェーブがかかった髪を掻き上げる。

「仕事楽しいの。あなたとフランスで出会った頃とは、見違えるようになっただでしょ？」

冬馬は思わず笑った。

「十年も経てば、誰でも変わるよ。俺も老けたし、これからお互い老いる一方だな。」

「私はただじゃ老いないわよ？女は三十からが勝負よ！」

美夜は溢れんばかりの笑顔を見せた。

その笑顔に冬馬は切なさを感じずにはいられなかった。

「美夜のそういうところは十年経っても変わらないな。前に向かって突き進む強さは変わらない。」

ふざけて見せる笑顔とは裏腹の冬馬の言葉に、美夜は表情を曇らせた。

「冬馬は、やっぱり子供が欲しい…？」

「そりゃ、自分の子供の顔は見てみたいな。」

冬馬は笑っていたが美夜は決して笑わなかった。

「ごめんなさい。でもたった一年でも、今仕事は捨てられないの。」

「分かってるよ。美夜が謝ることはない。」

冬馬の優しい笑顔に美夜は涙が溢れそうだった。

子供を好きなあなたに惹かれたのに、今の私にはそれを叶えられない。

それがどんなに私のわがままであっても、これだけは譲れない。

美夜は冬馬に申し訳なさを感じながらも、自分のまだ曲げられない信念を疑わなかった。

「ありがと。冬馬は私にとって本当に良き理解者よ。あなたがいるから私は頑張れるの。」

美夜は冬馬の背中に抱き付いた。

「あなたにとつての私も、そんな存在でありたい。」

背中に妻の温もりを感じながら、冬馬は愛しさと罪悪感に胸を痛めた。

「…でも、千子ちゃんとはどうやったら仲良くなれるのかしら？」
どきりと冬馬の胸が鳴る。

「兄を取られるショックのようなものは、私には分からないもの。
時が過ぎるのを待つしかないのかしら。」

背中の中の声に痛みにも似た衝撃を受けながら、

「そのうち、千子もそんなショック忘れるよ。」

そう答えて、冬馬の中には虚しさだけが込み上げた。

?

第九章 春雨

初秋の雨は弱々しく、細く静かにこぼれ落ちて、まるで止むことを知らない涙みたいだ。

そんなとりとめのないことを考えながら、千子は開け放していた部屋の窓を閉めた。

今日は日曜だというのに、家には誰もいない。

両親は二人揃って一泊二日の温泉旅行に出掛けているし、夏樹は朝からバイトだ。

もちろん美夜も仕事でいない。

兄・冬馬だけが昨夜仕事で遅く帰って来て、朝から起きた気配が一度もない。

まだ今も寝ているのだろう。

兄と家で二人きりで過ごすことは珍しい。

たいていいつも誰か他にも居るから、兄に男を感じたりしなくて済む。

けれど、たまに二人きりになるとどうしようもなく気まずさが込み上げてくるのだ。

この静かな家の中で二人きりになると、あの日を思い出してしまうから…。

タンタンと階段を下りて、キッチンへとつながるダイニングに入った。

しんと静まり返ったダイニングは、電気さえ点いていなくて外の雨の音だけがしとしとと聞こえてくる。

「お昼、どうしよう。」

ぼつりと言ってから、ダイニングの電気を点けた。

時計に目をやると、十一時を少し過ぎていた。

「仕方ない。自分で作るか！」

千子はキッチンに入って冷蔵庫の中の物色を始めた。
何を作ろう。

自慢じゃないが、兄とは違って料理は得意ではない。
はあと溜め息をつきながら野菜室を引き出して、その前にしゃがみ込んだ。

野菜室に手を伸ばそうとすると、千子の頭上から手が伸びて野菜室からトマトを一個取り出す。

驚いて千子が振り返ると、まだ眠気顔の冬馬が立っていた。

「あ、おはよう。」

「おはよ。」

何気なく挨拶を交わしたが千子の内心はドキドキとしていて、それを悟られないようにするので精一杯だった。

「何作るの？」

「え？」

「昼だろ？」

「うん、えっと何にしようか今考えてたところ。」

「考えるほどレパートリー持っていないだろ、お前。」

冬馬が勝ち誇ったように笑った。

「失礼ね！私だってお昼ご飯ぐらい作れるんだから！」

千子がムキになると冬馬は優しく笑った。

「分かってるよ。でも食うならうまい方がいいからな！君は座って待ってなさい。」

その笑顔に弱い。

そのことを知っていてやっているのだろうかと言いたくなる。

「じゃあパスタとミネストローネとサラダね！それからデザートもつけてね！！」

千子は口を尖らせて言った。

「金取るぞ？」

千子は笑った。

気まずさは心の片隅に残っていたが、穏やかで幸せな日曜の昼に

兄と二人きり笑い合える時間がどうしようもなく愛しく感じられた。慣れた手つきで料理をする冬馬の背中を、キッチンのカウンターに座りながら見つめる。

こんなＴシャツにジャージで料理してる姿なんて、誰も知らないだろう。

外ではいつもきつちりと身なりを正し、仕事に関しては厳しい兄がこんなだらない格好で私のためにだけに料理してくれる。

これ以上に特別な時間はないなと千子は顔を緩ませた。

「はい、ぼーっとしてないでテーブルに運んで。」

頬杖についてニヤける千子の目の前に出来たての Pasta が置かれる。

「はい！」

千子は湯気の立つ Pasta の皿を二つソファ―テーブルの上に置いた。

「はい、サラダも運ぶ！そっちで食うのか？」

「うん！テレビも見たいし！」

千子は冬馬の手からサラダを受け取った。

テレビを見たいというのは口実だった。

こんな静かな中で二人きりで食事なんて、耐えられそうにもなかったからだ。

「家でお店の味が楽しめるなんて、家族の特権だね。」

先にソファ―に座った冬馬の隣に腰を下ろして、両手に持ったお冷やをコトリとテーブルに置いた。

「だから金取るって言ったろ？」

「だめだよ！ミネストローネとデザートついてないじゃん！」

冬馬は笑いながら、Pasta を口に運ぶ。

「テレビつけていい？」

千子も一口サラダを食べてから立ち上がった。

「いいよ。」

本当に幸せだなと千子は感じた。

新婚さんみたいだなと思ってから、思った自分がちょっと恥ずかしくなった。

特に見たい番組もなかったが、恥ずかしさを紛らわすために笑いの絶えない番組を選んだ。

「こんな番組楽しいか？」

「楽しいよ。」

千子は冬馬の隣に座り直して、まだ温かいパスタを口に運んだ。

隣で笑いながら、自分の作った料理を頼張る千子は可愛い。

無邪気で屈託がなくて、そこに無償の愛を注ぎたくなる。

けれどそれはそこでとどまらないことをお互いよく知っている。

「うん！やっぱりおいしいね！」

「それはよかった！」

冬馬はグラスの水を口に運ぶ。

「ずっとこうやって、ただで兄ちゃんの料理を食べていたらいいのに！」

言ってしまったから千子は、はっとした。

冬馬も一瞬グラスを持つ手が止まったが、何も気付かないふりをした。

こんなに穏やかな時間の中では兄が結婚していることなど忘れてしまふ。

兄を独り占めしているような気になってしまふ。

何が新婚さんみたいだろう。

ただの憐れな不倫現場だ。

「でもそれは無理だな！私もいつかは結婚するだろうし。」

わざと言って千子は冬馬から顔を背けた。

「千子が結婚か。」

何げなく言っではみたが、千子が自分の知らない男の横で、幸せそうな顔を浮かべている姿など想像できなかった。

「やっぱり料理できる人がいいな。私料理うまくないし。」

「そうだな。」

冬馬は素っ気なく答えてから、楽しいとはとても思えないテレビを見つめた。

冬馬の興味薄な態度に千子も虚しかった。

「私の結婚式の料理は、お兄ちゃんの手料理にしよう。」
「嫌だよ。」

冬馬は千子を振り返り、少しきつい目をして見せた。

見つめ合ったまま沈黙になると、自然と唇を重ねてしまう。

それが何かに与えられた司令であるかのように、千子の唇は引き寄せられてしまう。

唇を離すと共に熱い吐息が漏れた。

次の息を吸い込む間もなく、また二つの唇は深く重なり求め合う。テレビの中の笑い声に漏れる声は掻き消されて、次第に千子の理性は失われていく。

ソファアの上に押し倒された千子の体は、身をよじり自ら一番寝心地いい場所に落ち着く。

ガシヤンと食べ途中の Pasta皿の中に、もがくような千子の手が入り込んだ。

冷めたクリームソースの付いた指は、冬馬の頬を伝いその唇の中へと潜る。

ソースの甘みが冬馬の舌を這って齒をなぞっていく。

耐え難い誘惑に冬馬の手は千子の肌へと伸び、決して深くはない胸の谷へと顔をうずめる。

千子の湿った指は冬馬の首筋に回され、その背中に爪を立てた。

耳元で聞こえる千子の早まる鼓動が、どんどんその先へその先へと冬馬の手を急かす。

抱き慣れた体は、次の行動を分かっているかのように冬馬を誘ってしまふ。

その時だった。

今まで笑い声が響いていた画面が質素なニュース画面に変わり、キヤスターの深刻な声が届いてくる。

千子は冬馬の身体を押し上げるようにして上体を起こした。

そのキヤスターの声とテロップの文字に千子の背筋にぞくりと緊張

のようなものが走る。

「連休の温泉街で大規模な玉突き事故…？」

テロップの文字を口に出して読みながら、冬馬は千子から身体を離れた。

「悲惨だな。せつかくの連休なのに。」

立ち上がって画面を消そうと、リモコンをテレビに向けたがその冬馬の手を千子が掴んだ。

その手がかすかに震えているように感じられて、冬馬は振り返った。

冬馬の目線の先で千子はカタカタと肩を震わせ、テレビ画面を正気を失ったかのように見つめていた。

「千子…？」

「お母さんたちは温泉に行ったの？」

千子の問いに、冬馬は何かを悟ったかのように持っていたリモコンを投げ捨て、震える千子の身体を強く抱き寄せた。

「大丈夫だ！親父たちが行ってるのは全然違う場所だよ。」

冬馬の心臓がばくばくと鳴る。

千子の傷は癒えてなどいなかったのだ。

自分の両親を失ったあの日から、どんなに明るくしていてもどんなに笑っていても何一つ傷は癒えていなかったのだ。

「うん、大丈夫。分かってる。」

その千子の言葉に、冬馬の心臓の音も落ち着いたが何とも言いようなない絶望感が打ち寄せてくる。

「分かっているんだけど、温泉とか事故とかいう言葉を聞くとたまに頭の中が真っ白になるの。すぐよくなるんだけど…。」

力なく笑った千子は七つのあの時と変わらず、弱々しく今にも消えてしまいそうだった。

「びつくりさせてごめんね。」

千子はそう言って冬馬の腕を離れた。

冬馬はなすすべがなくなつて茫然と立ち尽くすしかなかった。

「パスタ冷めちゃったね…。」

千子はテーブルの上のパスタに手を触れた。

自分でも知らない自分が、この胸には潜んでいる。

両親を失くしたあの日、私の奥底に刻まれた大きな傷は、消えることなくただ記憶の奥に無理矢理押し込められているだけで、ほんの些細なきっかけでひょっこりと顔を出す。

自分の力ではどうにもコントロールできない大きな力が、そこには働いているかのように。

兄との休日、甘い時間に溺れてしまいそうだった私に、まるで誰かが罰を与えたみたいだ。

千子はそんな気分に見まされて仕方なかった。

「ただいま。」

玄関から届く、聞き慣れた低い声。

どんよりとした空気の中の二人は、同時にそちらの方を振り返った。

「腹減ったあゝ！」

「夏樹！」

リビングに入り込んできた主に向かって、千子は思わず叫んだ。

「何で？ バイトは？」

「いやあシフト間違えちゃってさあ、休みだったのにせっかく来たんだから手伝って帰って捕まってタダ働きしてきちゃったよ！」

冷蔵庫から麦茶を取り出す。

「馬鹿じゃん、夏樹！」

千子は立ち上がって笑いながらリビングの出口へと向かう。

さっきまで兄と体を重ねようとしていたここで、三人になるのはどうも気が進まなかった。

「私やらなきゃいけないことあったから、ちょっと部屋行ってるね！ お兄ちゃん、後で食器片付けるからそのままにしてて！」

「いいよ、洗つとくから。」

「ラッキー！ ありがとう！！」

笑顔を見せて出て行く千子を冬馬は怪訝な顔で見つめた。

さっきまでの様子が嘘であったかのように、極自然な千子。

「あゝあれより腹減った！あ！お前らだけ何食ってんの？！」
ソファ―テーブルの上の二つのパスタ皿を見付けて、夏樹は思わず駆け寄る。

「ずるい！兄貴俺の分はねーの？！」

「あるわけないだろ！帰って来ないと思ってるんだから。携帯持ってるなら電話ぐらいしろよ。」

冬馬はさらに怪訝な顔をして見せた。

「兄貴が休みなんて聞いてなかったゝ俺もただでプロの味食いたかったゝ！！でも千子の料理食うよりマシだと思ってコンビ二弁当買って来たんだな、これが！」

ニツと冬馬に笑顔を見せてから、夏樹はダイニングに入った。

でも見逃してはいない。

不自然に冷めたパスタ。

皿に残る指の跡。

二人が好みそうにない番組。

つけっぱなしのテレビ。

カチャカチャと食器を重ねる冬馬を見つめながら、夏樹はダイニングテーブルの席についた。

何をしていたんだよ、兄貴。

二人きりで…。

今にもそう問うてしまいたかった。

カサカサとコンビ二弁当を開けて、割り箸を割る。

重ねた食器を両手に抱えて、冬馬がキッチンに入り込むとテレビの画面がまた変わった。

「さっきの続報？何かあったのか？」

のり弁の白身魚フライを頬張りながら夏樹が言った。

「ああ。」

と夏樹の問いにわざと素っ気なく冬馬は返した。

「玉突き？死傷者十名ってでかいな。」

そう言ってから夏樹は黙り込んだ。

しばらく沈黙してから、夏樹はもう一度口を開いた。

「なあ、兄貴。千子大丈夫だったか？」

そう言われて、冬馬は持っていた食器を思わず落としそうになった。それは紛れもなく、さっきのことを差しているのだろう。

その様子を見つめて夏樹の口が冷たく開いた。

「俺は知ってたよ。」

その言葉に、何とも言えない屈辱感みたいなものが冬馬の中に込み上げる。

「ずっと一番近くにいたからな。俺が一番よく知ってる。」

夏樹は決して笑わず、淡々と言いつた。

自分は誰よりも千子の傍にいたのだと、お前にだけは絶対に負けな
いと、まるでそう言いたげであった。

千子の全ては自分が一番よく分かっているはずであった。

冬馬は食器を洗う手を早めた。

けれど、自分は何一つ分かっていたような気にさえな
ってくる。

誰よりも、分かっているつもりでしかなかった自分の腑甲斐なさと、
まだまだたくさんあるであろう夏樹だけが知っている数々の千子の
姿に冬馬は嫉妬の念を感じずにはいられなかった。

背中に弟としてではなく、同じ男としての大きな気配を感じながら、
冬馬は精一杯の強がりと言っしかなかった。

「お前は知ってるのか？女の千子を。」

返す言葉をなくして、夏樹は悔しさにぎりつと歯を噛みしめながら
口に放り込んだフライを飲み込んだ。

絶対に、負けはしない。

この兄にだけは譲れない。

冬馬の冷めた口調に、夏樹はどうにもならない怒りを、ますます強
く感じずにはいられなかった。

?

第十章 兄妹

「あら、もうすっかり秋ね。」

庭の洗濯物を取り込みながら母親が呟いた。

物干し竿の先には一匹の赤とんぼがとまっている。

縁側に座って母親が取り込んでくる洗濯物をたたみながら、千子はその様子を見つめていた。

「だいぶ肌寒くなってきたしね。」

「本当、この間まであんなに暑かったのに！」

全ての洗濯物を取り込み終えて、母親も縁側で千子の向かいに座した。

「今日はお父さんも出張だし、冬馬も夏樹も夕飯いらないって言うし、美夜さんも帰って来ないなら夕飯適当でいいわね。」

母親は手で額を拭いながら笑った。

「うん！二人だけだもん、何でもいいよ。」

千子も笑った。

「よかった！ところで千子。いい機会だから言っとくけど、あんたいいかげん美夜さんの前での態度何とかしなさいよ？美夜さん、何ともないふりしてるけど本当は傷付いてるのよ？」

千子は口をつぐんでしょぼんとうつぶいた。

「分かってるよ。分かってはいるんだけど……」

「お母さんもね、分かっているのよ。あんたにとって冬馬は、実の兄以上に兄であること。だけどね、あんたももう立派な大人なんだから、もう少し顔に出すのを控えなさい。」

「……。」

「すぐに美夜さんのこと好きになれとは言わないから。徐々にいいから受け入れてあげてちょうだい。じゃなきゃ冬馬も気まずいでしょう。」

「そうかな。」

千子がつつむいたまま答えると、母親は困ったように溜め息をついた。

「どんなにやきもち焼いたって、兄は兄でしかないんだから妹は妹としてちゃんとしてなきゃだめなのよ？」

千子はそれ以上何も言わなかった。

母親もあきらめたように、それ以上言うのをやめて洗濯物をたたみ始める。

分かってるよ、お母さん。

だけど、男としての兄を知ってしまったから、愛してしまったから、どうしても無理なんだよ。

千子はうつむいたまま、涙をこぼした。

兄が身も心も愛し、選んだ女性なんか好きになれないよ。

「あらあら、子供みたいに泣いて！そんなに泣くことがありますか。」

「

涙を流す千子に気付いて、母親は思わず千子をその胸に抱き寄せた。その優しく温かい温もりの中で千子の目頭は余計熱くなった。

「ごめんね。ごめんね、お母さん。」

私は親不孝な娘です。

みんなを裏切り、兄を愛してしまっただろうでもない娘です。

母親の腕の中で千子の涙はとどまることを知らなかった。

オフィスのデスクに座って、千子は溜め息をついた。

まだ新人の千子に、主な仕事は雑用しかない。

目の前のパソコン画面を見つめたままもう一度溜め息をつく。

「沢田さん、さっきから溜め息五回目よ？」

心配そうに声をかけてきたのは同僚の三枝だ。

「あ、ああ、うん。」

思わずしどろもどろになってしまっただけから三枝の方を向いた。

「何か悩み事でもあるの？私でよければ聞くよ？」

「ありがとう。でも何でもないの。何かいろいろ疲れちゃって。」

どんなに仲の良い同僚でも、さすがに兄のことは言えない。

「やっぱり芸能人がお義姉さんになると気苦労が絶えなかったり？」

三枝は野次馬根性丸出しの笑顔で、千子に耳打ちした。

千子は一瞬ドキリとしたが何食わぬ顔で答える。

「違うよ。お義姉さんって言っても形だけで、滅多に会うことなんかないし。」

「そっかあ芸能人だしね。沢田さんのところのお兄さんもなかなかハンサムだし、いいなあ。」

千子は一瞬三枝から目を離して、またパソコン画面を見つめる。

「そうかな、あんなのただのエロおやじだよ。」

千子の言葉に一瞬三枝は眉を細めた。

「もう、お兄さんのイメージ崩れるようなこと言わないでよ。そう
だ！久しぶりにお兄さんのお店に食事に行かない？」

「ええ?!」

思わず千子は三枝の方を振り返った。

「いいじゃない！決まり！夜空けといてよ？」

少々強引に決まったが、内心千子も嫌じゃなかった。

兄に会える口実ができた。

しかし、心の中には母親の言葉が渦巻く。

兄は兄でしかなく、妹は妹でしかない。

それで想いを止められるのならとくにそうしている。

それができないからこんなに苦しいのだ。

千子はまた溜め息をついた。

仕事が終わると、仲の良い同僚たち五人が千子の周りをぐるりと
取り囲んだ。

会社の出口へと続く階段を下りながら千子と言う。

「本当に行くの？あんなの本当にただのエロおやじだよ！」

「また言ってる！多少エロおやじでもいいじゃない！ビジュアルよ
ければ！」

「そつよ！あの橘美夜を虜にしたのよ！」

きゃあきゃああと千子の周りでみんなが騒ぐ。

千子は小さく溜め息をついた。

最近本当に溜め息が多いななどと考えながら重いガラス張りの会社の扉を開けると、壁によりかかる夏樹が立っていた。

「夏樹?!」

千子が叫ぶと、夏樹は二ツと陽気に笑った。

「よう! 飯食い行こうぜ!」

「あ、今日はこれからみんなで食事に...」

「そうそう! 今からみんなでお兄さんのお店に行こうって話してたのよ。よかつたら夏樹くんも行かない?」

千子の言葉を遮って三枝が言った。

「また兄貴の店か。」

そう言って夏樹はちらりと千子に目配せた。

その後で三枝に笑顔を見せながら頭を下げた。

「ごめん、俺兄貴の店は苦手なんだ。何かこうナイフとフォークを使うような小洒落た店。」

「そっか。なら仕方ないね。せつかくここで待っててくれたんだし、沢田さん夏樹くんで行ってきなよ! お兄さんのお店には私たちだけで行つて来るから。」

「え?! でも私...」

そう言いかけた千子の言葉を夏樹が遮る。

「悪いな! じゃ、千子行くぞ!」

そう三枝たちに言い残すと、夏樹はぐいと千子の腕を掴んで歩き出した。

いつもよりも強引な夏樹に千子は変な胸騒ぎを感じた。

「痛いよ、夏樹!! 大体なんでこんな急に?!」

腕を掴む夏樹の手を振りほどいて、千子は立ち止まった。

「こつでもしなきゃ来てくれないだろ?」

夏樹に返す言葉がない。

「来てよかったよ。また兄貴の店に行くんだっただろ?」

「違うよ。みんなが行くって言ったから...」

「便乗して内心喜んでたくせに。」

夏樹はまた千子の腕を掴んで歩き出した。

「俺は兄貴の店みたいに洒落たところ苦手なんだよ。だから今日は学生らしく居酒屋！」

明るく笑う夏樹に、千子は何も言わずについて行くことにした。

千子が欠けた同僚四人は、冬馬の店に通され、席についたところだった。

「うん！いいお店よね。」

時間が早いため、まだ客はまばらである。

すぐにホールの女の子が笑顔で席の前に立つ。

「いらっしやいませ。お飲物からお伺いいたしますが、お決まりですか？」

「あ、じゃあワインを。白をボトルで下さい。グラスは四つ。」

「はい、かしこまりました。すぐご用意致します。」

そう言うて去ろうとしたウェイトレスに三枝が声をかける。

「あ！すいません！！今日沢田さんいらっしやいますか？」

「料理長の沢田ですか？いますけども、お知り合いですか？よかつたら沢田呼びますけれども？」

ウェイトレスはにこりと笑った。

「いえ！沢田さんの妹と会社の同期なんです。彼女も本当は一緒に来る予定だったんですけど、来れなくなってしまったんです。もし、彼女が連絡してくれてたら申し訳ないと思って……」

「分かりました。沢田に伝えておきます。」

ウェイトレスが去ったのを確認して、同僚の一人が口を開く。

「私お兄さんの沢田さんより夏樹くんの方がタイプだな。」

「そうね。何度か会ったことあるけど、気さくで明るし親しみやすいっていいかね！」

「でも私はやっぱりお兄さん派だなあ。沢田さんはエロおやじだなって言うてたけど、硬派な感じだし大人の色気が漂ってるって感じ。」

などと口々に言い合っているとテーブルの脇に影が映った。

「お待たせいたしました。白でよろしかったですか？」

三枝が見上げると、にこりと微笑む冬馬が立っていた。

「え?! あ、すいません! まさか沢田さん本人が来てくださるなんて!」

「いえいえ。おもてなしが仕事ですから。千子がいつもお世話になつてこちらこそすいません。」

そう言つて、見せる冬馬の笑顔はやはり女心を掴む。

「いえ! とんでもない。本当は今日も一緒に来るはずだったんですけど、急に夏樹くんが会社まで来て…」

「夏樹が?」

三枝の言葉に一瞬冬馬の表情が曇る。

「ええ。食事に行くつて言つてましたけど。」

「そうですか。あ! ささやかですが、今日はちよつとしたサービスをさせていただこうと思つてます。甘いものは好きですか?」

「はい!」

一同は声を揃えて返事をしてから、わあと歓声を上げた。

その様子に冬馬も満足気な顔を見せてから、ワインのボトルとグラスを置くと一礼して席を離れた。

夏樹がついに行動に出たな。

冬馬は思わず表情を歪めた。

「とりあえずビール二つ!」

「かしこまりました。」

居酒屋の店員が笑顔を残して去ろうとした背中に、千子が声をかける。

「あ! 私は小で。」

「はい、一つは小ですね。」

「何だよ、遠慮せずに飲めよ。兄貴という時はワインとかカクテルとか飲んでるんだろ?」

千子は大きく溜め息をついた。

「あのね、お兄ちゃんと食事したってそんなに飲まないのよ？って
いうか、何でそんなにお兄ちゃんを目の敵にするのよ。」

「そんなの分かってるだろ？」

夏樹が御通しに箸をつけながら言う。

「私たち三人は兄妹なのよ？」

千子は夏樹の顔を覗き込んだ。

「だから？」

夏樹は何食わぬ顔で答える。

「だからって、兄妹で好きだとか嫌いだとかないって言ってるのよ。」

「

「兄妹っていつでも血繋がってないだろ。」

「そういう問題じゃないでしょ。」

「そういう問題だよ。」

千子は大きく溜め息をついた。

「お待たせいたしました。先にビールですね。」

店員が大と小のジョッキを置いて去る。

「夏樹だってこないだ言ってくれたじゃない。私の幸せが自分の幸
せだって。恋だって見守ってくれるんでしょ？」

夏樹は黙ってビールを一気に飲み干す。

「言ったよ？相手が兄貴以外ならね。」

千子はまた溜め息をついてビールを一口飲む。

「お兄ちゃんはお兄ちゃんではないってば。」

「どうかね？あ！すいません！オーダーお願いします！」

夏樹は一瞬首をかしげてから、そばを通った店員を呼び止めた。

カーステレオの時間を見てから冬馬はエンジンを切った。

「まだ十時か。」

冬馬は車から降りて、玄関へと向かう。

大人げもなく、あれからずっとイライラしているのだ。

自分のどこに腹を立てる資格があるのか。

そう思っても、このイライラは治まらない。

「ただいま。」

ガチャリと玄関の戸を開けると母親がキッチンから出てきた。

「冬馬、早かったわね。あら？千子は？」

冬馬は乱雑に靴を脱ぎながら、機嫌悪げに答える。

「何で千子の名前が出てくんだよ。」

「遅くなる時はたいていあんと一緒にだからよ。今日は違うの？」

「夏樹と一緒にいいけど？」

「まあ夏樹と？珍しいこともあるのね。じゃあ二人は夕飯いらないのかしら。そして、何でそんなにあんたは機嫌悪いのよ。感じ悪い子ね。夕飯は？」

「いる。先風呂入って来る。」

冬馬はそのまま浴室に向かった。

「夏樹と千子是一緒なのか？」

ソファーに座って晩酌をする父親が、キッチンに立つ妻に向かって問うた。

「ですって。珍しいこともあるもんですね。それこそ、高校に上がるまではそんな珍しいことでもなかったんですけど。」

「まあ、そういうこともあるだろう。」

父親はそれ以上特に気にするでもなく、テレビのニュース画面を観ながら、グラスに缶ビールを注ぐ。

「ただいま。」

ガチャンと音とともに、玄関から夏樹の声が聞こえる。

「あら、噂をすれば！お帰り。」

母親が覗くと、玄関に倒れ込む夏樹の後ろにしかめっ面の千子が立っていた。

「お母さん飲み過ぎだよ、この馬鹿夏樹。」

そう言つて千子が顔を上げると、正面の突き当たりにある浴室から冬馬が出てくるところであつた。

「あらまあ。水でも飲んで早く寝なさい。」

「はあい！」

へべれけになつた夏樹がふらふらと階段を登つて行く。

「まったく、あの子は。千子は何か食べる？」

「うつん、いらぬ。何か冷たいもの飲む。」

そう言つて靴を脱ぐ千子の前に、タオルで髪を拭いながら冬馬が立
つた。

「ただいま。早かつたね、お兄ちゃん。」

千子が声をかけると、冬馬は機嫌悪げに千子を見つめてから黙つた
ままキッチンへと入つて行つた。

その様子を見て千子は表情を歪ませた。

「何あれ。」

「お母さん！一回部屋に荷物置いて来る！」

玄関から叫んで、千子は階段を駆け上がった。

「何なのよ、一体……」

ぼそりと呟いてから自分の部屋に入つて、ベッドの上にバッグを投
げ出す。

何か今日は疲れたなあ。

そう思いながら携帯を取り出す。

あのあと夏樹は、私と兄のことについて一度も触れなかった。

けれど、夏樹は気付き始めている。

バレルのは時間の問題だな。

千子は部屋を出ると隣の夏樹の部屋を見つめた。

「おふくろ、ビール！」

「はいはい。」

母親が冷蔵庫から缶ビールを取り出して、グラスと一緒に冬馬に手
渡した。

冬馬はこぼこぼとグラスにビールを注いで一気に飲み干す。

「今日はえらく早かつたのね。」

煮物の小皿を渡しながら母親が言う。

「ああ、今日は副料理長の崎坂がラストまでだったから任せてきた

んだよ。」

「崎坂さんってあの留学先で一緒だったって人かしら。」

ご飯をよそいながら母親が首をかしげる。

「そう。」

千子は夏樹の部屋の前に立った。

トントンと部屋をノックしてから戸を開ける。

「夏樹、入るよ。大丈夫？」

部屋の中はすでに真っ暗で、ベッドの脇に夏樹が倒れ込んでいた。

「夏樹！ちゃんとベッドで寝なきゃ風邪ひくよ！」

千子は部屋に入って夏樹を抱き抱えた。

「うん…」

夏樹は苦しそうに唸ってから千子に抱き付いた。

「ちよつと…！夏樹…！」

千子が無理に突き飛ばそうとすると、夏樹は千子にしがみ付かせた手の力を強めた。

「千子、本当にずっと好きだったんだ。お前がこの家に来る前からずっと、それは今も変わらない。好きなんだよ。何で分かってくれないんだよ。」

うわ言のように夏樹が千子の耳元で呟く。

「夏樹、酔い過ぎだよ！ちゃんとベッドに入って！」

なだめるようにして、千子は夏樹をベッドに横たえた。

ベッドに横になると夏樹はすぐにそのまま眠ったようだった。

パタンと夏樹の部屋を出て千子は深い溜め息をつく、一階へと下りた。

夏樹の気持ちには答えられない。

夏樹を男として愛するなんて、できない。

千子がキッチンに入ると、冬馬がビール片手に不粋な顔で夕食を食べている。

「千子もビールにする？」

「うつん、飲んできたから熱いお茶でいい。」

冬馬の向かいに座りながら母親に笑顔で言う。

「珍しいわね、あんたと夏樹が食事してくるなんて。」

「うん。夏樹が会社まで来てくれたから。部屋のぞいたら、夏樹もう寝てたよ。だいたい飲んでたし。」

「もう、あの子ったら。」

コトリと、湯気の立つ湯呑みを千子の前に置いた。

「ありがとう、と言ってお茶を口に運びながら正面の冬馬に目を向けると、冬馬の目が千子をじっと捉えていた。」

笑うでも睨むでもなく、ただ不機嫌な顔つきで見つめてから、千子と目が合うとふいと目をそらした。

思わず千子もむっとする。

「おい！俺はもう寝るぞ。お前たちもいつまでもしゃべってないで早く寝ろよ。」

父親がダイニングテーブルの横に立ち止まって言った。

「はいはい、おやすみなさい。」

母親が言うのと、片手を上げて父親が寝室へと入っていった。

夏樹は階段上からダイニングの様子を伺っていた。

夏樹は寝てなどいなかった。

千子と冬馬がまだ部屋に上がってこないのを確認してから、夏樹は静かに千子の部屋に入った。

千子の部屋に入ってから、夏樹は迷うことなくベッドの上の携帯を手取る。

夏樹はすうと一度深呼吸をしてから携帯を開けた。いけないこととは十分分かってる。

けれども確かめずにはられない。

受信ボックスを開いてカチカチとページを送っていく。

十九時三十二分。

送り主は沢田 冬馬。

夏樹の胸が変な動悸を覚える。

意を決して受信メールを開くと、そこには時間とホテル名、部屋番号。

それから、母親が心配しないように連絡をしておくようにと書いてあった。

それが一体何を意味するのか、夏樹は一瞬で悟った。
愕然とする。

お前は女の千子を知っているのかと言った冬馬の顔がよぎる。
その言葉の意味を、今理解したのだ。

薄々千子の兄貴に対する気持ちには気付いていた。

兄貴が変に自分に対抗意識を持っていることも感じてはいた。
けれどもまさか、まさか一線を越えていたなんて…。

ふつふつと怒りにも似た絶望が込み上げる。

二人で自分を笑い者に行っていたに違いない。

二人揃って馬鹿にしていたに違いない。

夏樹は部屋を飛び出した。

自分の部屋に戻ると、ベッドの脇に腰を下ろして頭を抱えた。

「絶対に、俺は認めない。絶対に。」

「ごちそうさま。もう寝るよ。明日も早いし。」

そう言って冬馬がガタリと立ち上がった。

「はいはい、おやすみなさい。」

「あ、じゃあ私もお風呂入って寝るね。」

千子も立ち上がった。

「はいはい、上がる時にお風呂のガス止めてちょうだいね。」

冬馬の食器を片付けながら母親がにこりと笑った。

「はい！」

冬馬は、無愛想にキッチンを出て階段に足をかける。

千子は急いでその後を追いつけて冬馬を呼び止めた。

「お兄ちゃん！」

冬馬は立ち止まって、無言で振り返る。

「何でそんなに機嫌悪いの?! さつきから態度悪いしさ。」
「別に。」

そうとだけ言って、冬馬はまた階段を上がり始める。
千子は更にむっとしてくりと方向転換すると、ドシドシと足音を立てながら浴室へと向かった。

「別について何なのよ!!! 別についてこないでしょう!」
千子は一人でそうばやきながら浴室へ入った。

冬馬が階段を登り終えたと夏樹が立っていた。

「何だ、寝たんじゃなかったのか。」

冬馬はそう言って夏樹の横を通り過ぎる。

その腕をすかさず夏樹が掴んだ。

「兄貴、今日俺と千子が何してたか気にならないのか?」

「何で一々お前と千子のことを、俺が気にしなきゃいけないんだ。」

「千子は愛人だろ? 兄貴。」

夏樹の言葉に冬馬は思わず振り返った。

「そうなんだろ、兄貴。」

「何言ってるんだよ。そんな馬鹿なことあるわけないだろ。」

冬馬は夏樹の腕を激しく振りほどいた。

「千子の気持ちを利用して弄んでるんだろ? 千子ならお手軽に手短かに都合よく使えるもんな。」

「そんなはずないだろ。千子は妹だぞ? お前どうかしてるぞ。」

「とぼけるならとぼけるでいいよ。そのうち確実な証拠を掴んで叩きつけてやるよ。」

「勝手に言ってる。」

冬馬は吐き捨てるように言ってから、部屋に入って行った。

お風呂から上がった千子はキッチンを覗き込んで、食事の後片付けをする母親に向かって声をかける。

「ガス切ったからね。お母さん、おやすみ。」

「ありがと。風邪ひかないようにちゃんと髪乾かしてから寝るの

よ、おやすみ。」

「はいはい！」

そのまま階段を上がる。

部屋に入ろうとして、ふと冬馬の部屋の方を見やる。

なぜあんなに機嫌が悪いのか、もやもやとしてならない。

千子は部屋に入るのをやめて、冬馬の部屋の前に立った。

怒ってる理由を聞かなくてはすっきりとしない。

しかし、千子にとってこの部屋は一番嫌いな場所である。

そんなに多いことではないが、兄と美夜さんが過ごしている部屋。

兄と美夜さんが愛し合う場所。

千子はノックしようとしてやめた。

しかしその場から去ろうとした瞬間、冬馬の部屋の戸が開かれる。

驚く千子の腕を掴んで、冬馬はそのまま部屋の中に引き込んだ。

「何するのよ！」

部屋に引き込まれた千子の背中ではボタンと部屋の戸が閉まる。

「何で今日そんなに機嫌悪いわけ？私、何かした？」

「お前、今日夏樹と何してた？」

冬馬の冷たい声が千子に問う。

「何って、ただ食事してただけよ。」

「食事だけか？」

「当たり前じゃない。食事以外何があるのよ。夏樹はあんなへべれけだし。」

「夏樹は酔ってなんかいないよ。」

「は？」

千子は怪訝な顔で冬馬を見つめた。

「お前、夏樹に何言った？」

「何って、私たちのこと？何も言っていないよ。言えるわけないじゃない。」

冬馬は溜め息をついた。

「何怒ってるのよ?!夏樹と食事してたことがそんなに気に入らな

いの?!くだらないヤキモチ?」

冬馬の怒り交じりの溜め息に、千子は思わず腹が立った。

「そんなことで機嫌悪くするなんて、大気ない。」

冬馬も千子の言葉に思わずむっとする。

「夏樹の前であんまり無防備になるなって言っただろ?!」

「無防備って、別に無防備なつもりはないよ!普通に食事してただけだし。」

「お前は夏樹の気持ち知ってて、酒の飲むような店に簡単にひよいひよいとついてたんだろ?!」

千子も溜め息をついた。

「ひよいひよいとって、夏樹でしょ?有り得ないよ。」

「お前にそんな気はなくても、あいつはそういうつもりなんだよ。」

「何よ!一人前にヤキモチなんか焼いて!ヤキモチなんか焼ける立場じゃないくせに!自分は美夜さんいるくせに!」

言ってしまったから千子のはつとした。

何も言わず表情一つ変えない冬馬に言い捨ててから部屋を出る。

「夏樹には何も言っていないから。」

千子が出て行ってから冬馬は、やり場のない怒りを覚えて机の上の携帯を思わずベッドに投げ付けた。

?

第十一章 烈火

冬馬が職場で溜め息をつくことは珍しい。

冬馬は業務用の大きな冷蔵庫の前に立つて、溜め息をついた。

それにすかさずちよっかいを出したのは、この店の副料理長を務める崎坂であつた。

「沢田さんが溜め息なんかついて、奥さんとケンカでもしたんですか？」

崎坂が隣の冷凍庫を開けながら笑つた。

崎坂はフランスの店で一緒に修行を積んだ、いわばもう一人の兄弟みたいなものである。

「別にケンカなんかしてないよ。」

冬馬も冷蔵庫の扉を開けながら言葉を返す。

「それとも、千子ちゃんですか？」

冬馬は中から冷凍されたベーコンの塊を取り出して、ボタンと冷蔵庫の扉を閉めた。

「お前まで何言ってるんだよ。」

冬馬はまた溜め息をついて見せた。

「お前までつてどういうことですか？」

「何でもみな俺と千子をセットで捉えるんだ。」

「そりゃ仲のいい兄妹だからですよ。この歳になってあんなに仲のいい兄妹なんて珍しいですからね。」

崎坂も冷凍庫の戸を閉める。

「俺のことはどうでもいいから、仕事しろ。」

そう言つてその場を去ろうとする冬馬の背中に、崎坂が声をかける。

「そろそろ関係も潮時ですか？」

冬馬は振り返り、表情を歪めた。

「関係？」

「沢田さんと千子ちゃんのですよ。ずっと前から勘づいてましたよ。」

千子ちゃんの沢田さんを見る目は妹の目じゃない。」

崎坂は微動だにせず、冬馬を見つめた。

「他の誰も気付かなくても、俺には分かります。ずっと一緒に仕事してきましたし、千子ちゃんは可愛いですからね。」

冬馬は何も言わずに、前に向き直った。

「お前はまだ何も分かってないよ。」

崎坂は怪訝な顔をした。

「千子は俺を憎んでる。ずっと憎んで恨み続けてきたんだよ。」

冬馬はそう言い残してその場を去った。

その場に残された崎坂は、釈然とせず、呆然と立ち尽くした。

あの兄つ子の千子ちゃんが沢田さんを憎んでる……？

沢田さんと一緒に日本に帰って来た時から、千子ちゃんの沢田さんに対する感情は明らかだった。

その千子ちゃんが沢田さんを恨んでる……？

二人が関係を持っているかは憶測でしかなかったが、根拠のない確信があった。

二人はどんな形であれ、想い合っているようにしか見えないのに。

崎坂はますます怪訝な顔をせざるを得なかった。

千子は、とぼとぼと歩いていった。

冬馬の店へと続く通い慣れた道のりを一人歩く。

駅の沿線に沿うこの道は、夕暮れ時になると人通りが多くなる。

幾人もの人の波に押されて、千子は何となくこの道を来てしまった。冬馬とはあの日以来まともに口をきいていない。

千子が入りもしない店の前に立って、小さく溜め息をついた。

突っ立ったままの千子の横を何組もの客が店の扉を開けて入って行く。

入っても気まずくなるだけだ。

もやもやと釈然としないものをまた抱えたまま去ろうとした千子の背で、店の扉が開かれた。

「千子ちゃん……？」

千子が振り返ると、コックハットを外した崎坂が立っていた。

「崎坂さん!!」

「やっぱり、千子ちゃんだ! 沢田さんなら中にいるよ。」

千子は苦笑した。

「別に兄に会いに来たわけじゃないですから。」

「珍しいね。」

「今ケン力中なんです。」

「沢田さんと千子ちゃんでもケン力なんかするんだね。」

崎坂は、わざと何も知らないような素振りで笑って見せた。

「しょっちゅうしてますよ。」

「そうなの? あ! 今からちよつと時間あるかな?」

そう崎坂に聞かれて千子は不思議そうに首をかしげながら答える。

「ありますけど…」

「夜まだならちよつと付き合ってくれる? 俺、今から上がりなんだ。」

目を丸くしながらうなづく千子を尻目に崎坂はにこりと笑った。

崎坂が案内したのは、インテリな彼の雰囲気らしい創作寿司屋である。

「創作寿司なんて初めてです!」

カウンター席に座って千子は思わず感嘆の声を上げた。

「そう? うまいけど、たまにゲテものらしきものも混ざってるよ。」

そう言って、隣に座る崎坂が笑った。

私服に着替えた崎坂は、度の低い白いフレームのメガネにお洒落なシャツと細身のパンツ。

千子は内心嫌いじゃないかと浮かれた。

スーツの似合う冬馬の、スマートな大人の着こなしも好きだけどこ
ういうのも素敵だなと千子は思った。

「好きなもの頼みなよ。」

「はい!!」

元気よく返事をする。

兄妹だからだとか、不倫だからだとか何も気兼ねせず過ごせるこんな時間に心の隅ですっと懂れていた。

そんな気がする。

千子はいつになく明るかった。

「元気だね。さっき店の前にいた時は何だか暗い顔してたけど。」

崎坂が千子を見つめる。

「そんなことないですよ！」
そう？

そんな素振りで、崎坂は目の前に出された寿司を箸で口に運ぶ。

千子は何も気に留めず、崎坂に手渡されたお品書きを広げた。

「千子ちゃんさ、沢田さんのこと好きだろ？」

何気なく聞いた崎坂の口調に戸惑いながらも、千子とはつさに首を横に振る。

「何言ってるんですか？！兄ですよ？」

「戸籍上は、だろ？」

崎坂は湯気の立つあがりを一口静かに飲み込んだ。

「…知ってるんですか？」

「沢田さんフランスにいる頃ね、よく千子ちゃんのこと話してたんだ。すごい可愛がりようが聞いてるだけで伝わってきたよ。」

千子はうつむく。

「でもある時、いくら何でも溺愛過ぎだろうと言ったら沢田さんは、血の繋がりが無いことを教えてくれたんだ。血が繋がらないからこそ、本当の兄以上に兄にならなくてはならないのだと。その後で、甘やかし過ぎはよくないかなって笑ってはいたけど。」

崎坂はちらりと千子を見やった。

いたたまれない。

千子は正面のお品書きの文字をぼんやりと眺めた。

兄が兄として私を大事に思っていることを知れば知るほど、私の胸は締め付けられる。

兄がフランスやイタリアにいる間は、誰もこんなことになるなどと微塵も思っては思つてなかったのだ。少なくとも兄は。

「沢田さんのその言葉に嘘はなかったよ。帰国するまではね。」
崎坂は話を続けた。

「初めて千子ちゃんを空港で見た時に何となく思つたんだ。千子ちゃんは沢田さんのことを好きなんじゃないかってね。」

崎坂はまた湯呑みを口に運んでから店主に声をかける。

「彼女にも適当に何かおすすすめ握ってください。食べるよね？」
千子はこくと頷いた。

「沢田さんも千子ちゃんのこと好きだよ。」

その言葉に千子は勢いよく頭を上げる。

「それは違います！兄の好きは私の好きとは違います。」

「そうかな。妹としてしか見てない女を抱けるかな。」

崎坂はじつと千子を見つめた。

「…兄はそんなことまで崎坂さんに…？」

千子は眉をひそめた。

「…ごめん、今のはちよつとカマかけた。」

千子は崎坂の言葉に呆れ混じりの溜め息をついた。

「最低です。」

崎坂は頭を下げる。

「…それは憶測でしかなかったんだけど。今のは本当にごめん。」

「軽蔑しますか？近親相姦に不倫。私のこと。」

「軽蔑？！まさか！」

千子の言葉に崎坂は目を丸くした。

「近親相姦ってオーバーだな、戸籍上の話だろ？血が繋がってなければ他人だよ。不倫だってそう。したくてしてるわけじゃないだろ？好きになつてしまうのは努力でどうにかできるものじゃない。」
千子は思わず泣きそうになった。

公に冬馬との関係を明かしたのはこれが初めてだった。

誰にも言うことすらできなかったことを、否定するどころか真剣に向き合って話をしてくれる崎坂に感謝の念にも似た感激を覚えた。言葉を詰まらせた千子に崎坂は優しく諭す。

「千子ちゃんは沢田さんを男として真剣に好きなんだろう？ だったら好きになつた感情まで恨んだり憎んだりしちゃいけない。堂々としていればいい。沢田さんを好きなことが悪いことなはずないんだから。」

千子は静かに二、三度頷いてから返事をした。

「はい。でも兄の好きは恋愛感情じゃない。そんな気がします。」
「何で？」

「だって…兄が私を抱くのは独占欲と征服欲を満たすため。それに寂しさを紛らわすため。それだけなんです。」

「誰が言つたの？ そんなこと。」

千子は少し口調を強めて言う。

「誰に言われなくても分かります。」

崎坂は笑った。

「千子ちゃんは男男というものを難しく考え過ぎだよ。男はもっと単純で簡単な生き物なんだよ、女と違ってね。」

千子は怪訝な顔をして見せた。

千子の方に向き直って、崎坂は話し出す。

「好きだから触りたい、好きだから抱きたい、好きだから誰にも渡したくない、好きだから誰にも触らせたくない。それだけなんだよ。征服したいとか独占したいとか考えて行動してるわけじゃないんだ。」

崎坂は一度間を置いてから言った。

「少なくとも沢田さんは俺が知ってる限り、そんな適当に女を扱う人じゃないし。大事な千子ちゃんなら尚更だろう。まずは千子ちゃんが自分の気持ちに素直になることだ。この先何があっても俺は沢田さんと千子ちゃんの味方だから。」

崎坂の笑顔に千子は素直に頷いた。

ほっとした表情で微笑む千子の前に、店主が握り立ての寿司を笑顔で置いた。

「はい、ゆっくり食べな。」

「ありがとうございます。」

千子がお礼を言って寿司に箸をつけようとすると、携帯の着信音が鳴った。

「崎坂はどこ行った？」

厨房の一番奥で魚を引きながら冬馬が隣のスタッフに声をかけた。

「崎坂さんならもう上がりましたよ。今日は崎坂さん早上がりですから！」

冬馬に聞かれたスタッフが答えると、その後ろを通っていたホールの子がきょとんとした顔で口を挟んだ。

「崎坂さんならさつき帰ってるの見ましたよ。ゴミ捨てに外出した時崎坂さんと千子ちゃんが歩いて行くの見たから。」

「千子？」

冬馬が眉間にしわを寄せて言った。

「はい、沢田料理長に用があつたんじゃないのかと思いましたから。」

冬馬は軽くトントンと二、三回拳で口を打ってから、何かを考えるように遠くを見つめた。

鳴ったのは崎坂の携帯で、崎坂は後ろのポケットから携帯を取り出すと着信画面を見て立ち上がった。

着信画面には沢田 冬馬と表示されている。

「ちよつとごめん、電話出てくる。」

携帯を千子にかざして見せてから崎坂は店を出た。

「はい、崎坂です。」

「今、どこにいる？」

冬馬は店の外に立って言った。

「今、外で飯食ってます。」

「お前、千子と何の話してるんだ？」

「何って別に……店の前で偶然会ったから食事に付き合ってもらっただけです。千子ちゃんが、沢田さんとケンカして顔合わせずらそうだったから。」

崎坂はわざと意地悪い口調で言った。

「別にケンカなんかしてないって言っただろ。」

「千子ちゃんはそうは言ってませんでしたけどね。沢田さんも素直になった方がいいですよ？意地ばかり張ってたら千子ちゃん誰かに持つてかれまますよ。」

冬馬は機嫌悪く溜め息をついた。

「あんな子供誰が持つていくんだ。」

冬馬が溜め息混じりに言ってから、崎坂はわざとらしい笑みを浮かべて言う。

「例えば俺とか。」

「馬鹿なこと言っな。お前みたいな女たらしに千子を任せられるか。」

「俺じゃなくても、誰にも千子ちゃんを渡したくないんでしょ？」

崎坂の言葉に答える術を失って、冬馬はバツが悪そうに口をつぐんだ。

「今日俺車じゃないし、今から千子ちゃん連れてそっち戻りますから帰らないで待つてて下さいよ。」

「戻って来なくていいよ。」

「千子ちゃん女の子一人で夜道を歩かせるわけいかないですから。じゃ、待つてて下さいね。」

崎坂は一方的に電話を切ってから、店の中に戻った。

何が今日車じゃない、だ。

あいつ、わざと車置いて行っただけ。

冬馬は、崎坂の車が停めてある後方の社員駐車場を見つめた。

「千子ちゃん食べた？」

崎坂が席に戻って言った。

「はい！お腹いっぱいです。」

千子の笑顔を見てから崎坂は千子の肩をぽんと叩いた。

「じゃあ行こうか。俺、一回店に帰らなきゃならなかったから一緒に行こう。」

「え？！店にですか？いや、でも……」

こんな時間に戻ったら、兄と帰る羽目になってしまう。

「大将、お勘定！こんな時間に千子ちゃん一人で帰すわけにいかないだろ？俺今日車じゃないから送ってあげられないし。」

「でもっ……」

千子が戸惑っていると、崎坂は勘定を済ませながら笑った。

「さつき素直になるって約束しただろ？大丈夫だよ。」

千子は戸惑いながら、うんと頷いた。

冬馬はスタッフが全員帰ってしまった後の店の前に立った。

店の鍵を閉めて、最後の玄関灯を消す。

それから社員駐車場に回り、愛車の黒い車の後部座席に汚れたコックコートの入ったビニール袋を無造作に置いた。

後部座席の扉を閉めると、懷から一本タバコを取り出して車に寄りかかりながらライターの火を点けた。

タバコの煙が真っ直ぐに上へと伸びては消える。

それを見つめながら、冬馬はぼんやりと考えた。

このままではダメだということは分かっている。

自分が愛すべきなのは千子ではなく、妻の美夜なのである。

美夜は良きパートナーである。

自分に誇りを持ち、決して揺るがない精神と夢に向かって突き進む強さがある。

そしてその信念は自分にも言えることで、互いを尊重し高め合える絶好の相手であることは言うまでもない。

それは美夜も思っていることだろう。

だから結婚にも至ったのだ。

会う時間が少なくても、互いの信念がそれを埋める。

だからとは言えないが、千子を抱くのは淋しいからではない。

千子は愛しい。

その瞬間、女として自分を求めてくる千子はいとおしくて、理性が働かなくなる。

がむしゃらに求め、年甲斐もなく立場も忘れて嫉妬までしてしまう。美夜が他の男と食事をしていたとして、果たしてそこまで嫉妬するだろうか…？

千子を愛していないと言えは嘘になる。

けれど千子は、もはや妹ではない。

誰にも渡したくない。

それが自分勝手なわがままだとは分かっている
いずれ千子も恋をするだろう。

この腕から離れ、違う男の胸に抱かれる日がくるだろう。

その時、俺はどうするのだろうか…？

そう思っ、地面に落としたタバコを足で踏み消すと崎坂の声が冬馬を呼んだ。

「沢田さん！」

その後ろからとぼとぼ歩いてくる千子を冬馬はじっと見つめた。

「すいません、遅くなって！さ！遅いし、千子ちゃんも早く沢田さんの車に乗って！」

「遅くなるなら一言電話でもしろよ。」

「はい、すいません！」

崎坂が謝るのを見てから冬馬は千子をつっけんどんに車に促す。

「早く乗れ。帰るぞ。」

「う、うん…。」

冬馬が素っ気なく言っ、千子も戸惑いながら頷く。

千子がぐると車の後ろを一周して助手席に座った。

その間に冬馬は崎坂に声を落として聞く。

「千子に何もしてないだろうな？」

「当たり前じゃないですか。何かしてたら戻って来るわけないじゃないですか。」

崎坂の答えを聞いてから冬馬も運転席に収まる。

バタンと千子が扉を閉めると同時に、車のエンジンがかかった。

千子は助手席の窓を開けて、助手席側に回って来た崎坂に手を振る。

「今日はありがとうございました！ごちそうさまでした！」

「いえいえ、こちらこそ家まで送ってあげられなくてごめんね。沢田さんと気を付けて帰りなよ。」

はい、と言ってから千子は窓を閉めた。

店の駐車場を出ながら冬馬が無言でハンドルを切る。

車が走り慣れた道を走っていく。

冬馬のハンドルを握る手を見ながら、ふとしばらく触れてないなと千子は思った。

手だけではなく、その唇もその頬もその温かく広い胸も。

一度そう思い始めると、無性に触れたくてたまらなくなる。

その繊細な指の先で触れて、その滑らかな舌先をそつと這わせて、それから……。

けれど言葉に出せないでいる千子の脳裏に、素直になれという崎坂の言葉が蘇る。

「……………」

無言の千子に冬馬はかける言葉が見つからない。

黙って運転を続ける。

素直になれと言われても、今さら素直なんて意味がない。

素直になったところでどうなると言っただ。

その先には何もない。

ならばいつそこで全て終わらせてしまうべきなのではないか？

車のライトに照らし出された道を見つめながら冬馬は思った。

元々この関係に未来などなかったのだ。

何も求めてはいけない。

千子は兄を失いたくないだけでその身を差し出しているだけなのだ。男としての俺など欲してはいないのだ…。

走っている車は他にない。

信号で車が止まったところで千子がぼつりと言った。

「ねえ、家に帰りたくない。」

そう言われて、一瞬動揺したが冬馬は正面を向いたまま言う。

「今日はダメだ。明日早いし。」

千子は何も言わず窓の外に目をやった。

「本当。明日は仕入れで四時起きなんだ。」

信号が青に変わる。

「まだ怒ってるの?」

外を見つめたまま千子が言った。

「怒ってないよ、夏樹が勝手に一人で盛り上がってるだけだし。」

「夏樹に何か言われたの?」

千子は冬馬を振り返った。

「夏樹は俺たちのこと、完全に気が付いてるよ。」

「何で?!」

千子は思わず顔をしかめてすつとんきょうな声を上げた。

「知らないよ。知らないから俺はお前を問い詰めたんだろ?」

「…どうしよう。」

そう呟いてから千子はうつ向いた。

「どうするも何も、知られてしまったもんは仕方ないし、俺たちが何かできるとすれば一つしかないだろ。」

「一つ?」

「この関係を終わらせることだ。」

「終わらせる…?」

千子は一瞬言葉を失った。

言ってしまったから冬馬は後悔した。

終わらせることなどできるのだろうか?

千子を手離すことなど、本当にできるのだろうか?

千子は茫然とした。

うつすらとこのセリフが兄の口から出されることは分かっていた。

だけど、実際言われてしまうと言いようのない絶望感が押し寄せる。

「…もうこうやって二人では会わないっていうこと…？」

「…そういうこと。」

沈黙が車中を埋め尽くす。

「ただの兄と妹に、戻れると思う…？」

ぽつりと千子が言った。

戻れるわけない。

体の熱さを知ってしまったのに、今さら何食わぬ顔して兄妹になんて戻れるわけがない。

「戻るんだ…。」

冬馬もぽつりと言った。

それを聞いて千子は怒りを隠すことができなかった。

「お兄ちゃんはずるいよ。いつもいつも、自分本位で私の気持ちなんかこれっぽっちも分かってない。」

「分かってるよ、これで俺から離れられる。」

「離れられなくしたのはお兄ちゃんじゃない。離れられるのならとつくに離れてる。今さら、バレたからって逃げるなんてずる過ぎる

！！」

また沈黙が二人を包む。

散々私の心と体を掻き乱しておいて…こんな呆気なく終わりを告げるだなんて…

思わず涙が溢れそうになって千子は窓側を向いた。

車が家までほんの数百メートルの辺りで停まった。

冬馬はハザードをたいて、車を路肩に寄せて停めた。

家が見える所まで来て、冬馬が急に車を停めたので千子は驚いて冬馬を振り返った。

千子が振り返ると、冬馬は唇が触れる距離まで顔を近付けた。

「今さら兄妹になんて戻れるわけないだろ。」

そう動いた唇が千子の唇に触れる。

その言葉の意味なんか分からない。

だけど、さっきのセリフを今すぐ取り消して欲しい。

例えそう思っている言葉にしないで。

声になんかしないでよ。

ずっとこうやって触れていてよ。

決して私のものになんかならなくてもいいから、二度と触れないなんて言わないでよ。

ねえ、お兄ちゃん。

千子は冬馬の首に手を回した。

手離すことなんかできない。

例え一生兄としか呼ばれなくても、それでも離れられない。

それが罪であっても。

誰のものにもなるなよ。

なあ、千子。

窓からの隙間風の中で、二人は何度も唇を重ねた。

部屋の窓から車が見えた。

夏樹は部屋の窓辺に立って、その先に見える車の中を見つめていた。

叩きつけられる現実はとてつもなく残酷だ。

夏樹は心からそう思った。

分かっただけだったが、目の当たりにするとさすがに堪える。

好きな女と実の兄が愛し合う現場なんて、最高に最悪だ。

「そんなの認めない。」

夏樹はシャツとカーテンを閉めた。

唇を離すと熱い吐息が漏れた。

はあと一息ついて、するりと冬馬の首から腕をほどいた。

「早く家に帰らなきゃね。誰かに見られたら困るし……。」

「ああ。」

冬馬は車を出して、家の車庫に車を入れた。

一緒に家に入ると、夏樹が玄関に立っていた。

冬馬は何も言わず夏樹の横をすり抜けてキッチンへと入っていく。

「今日はホテルには行かなかったんだな。」

「やめて。家の中でそんな話しないで。」

つつけんどんに言い放って、千子も靴を脱ぐ。

「あんな家の前でキスなんかしないで欲しいね。」

夏樹も負けじと言い返す。

「覗き見なんて、趣味悪い。」

「誰も見たくて見たんじゃないよ。まさかあんな家の目の前でするなんて誰も思わないだろ。」

千子は無言で玄関に上がる。

「…何で知ったの…？」

「携帯を見た。千子の。」

「最低ね。」

千子は吐き捨てて階段に向かう。

「どっちが最低だよ。何食わぬ顔して嘘ついて、騙して俺の気持ち知りながら笑って…。」

「笑ってなんかないわよ。私だって必死なのよ。狂いそうなほどにね。」

千子は階段をゆっくりと上がった。

さつき兄が言った通り、関係を終わらせたら楽になるんだろうか。今は辛くても、時が解決してくれるのか。

そうした方がいいのかな…。

そう思いながら部屋に入ろうとした腕を夏樹がガシツと掴んだ。

「待てよ。お前だけ言いたいこと言って終わらせる気か？」

夏樹の低い声が耳元で言った。

掴まれた腕が痛い。

顔を歪ませる千子などお構いなしに、夏樹はそのまま隣にある自分の部屋へと千子を引きずる。

「痛い！離してよ！！大声出すわよ！下にはみんないるのよ！私が

大声でしたらみんな駆け付けるんだから！お兄ちゃんも！！」

夏樹はカッとなって、千子を一気に自分の部屋へと投げ込んだ。

「それはどうかな？」

ボタンとドアが閉じると同時に、夏樹が千子を引き寄せ唇を塞いだ。千子にもがく暇さえ与えず、唇をこじ開けて強引に夏樹の舌が入り込んでくる。

千子が何とか押し出そうとするが、深く入り込んだ舌は段々とエスカレートする。

背筋にぞくつと汗が伝う。

こんなの私の知っているキスじゃない…。

夏樹の手がするりとスカートの下に滑り込んだ。

思わず夏樹の頬に平手打ちを食らわしたところでやっと夏樹の唇が離れた。

「最低よ。夏樹がこんなことする奴だなんて思わなかった！もう顔も見たくない！！」

「…俺も男なんだよ。いつになったら俺はお前の中で男に成長すんだよ。」

こんなことをする夏樹なんて知らない。

男の夏樹なんて知らない。

「夏樹は男だとか男じゃないとかそんなじゃなくて、私の中では唯一の特別な存在なの！誰にも譲れない特別な位置にいるの！夏樹は夏樹以外の何者でもな…」

「俺は！！俺は特別な位置なんか欲しくない。お前の中で男でいられなきゃ意味がないんだ。」

千子は言葉を失う。

「…何を言ってるの？おかしいよ？」

「俺がおかしいなら兄貴も一緒だろ？兄貴になんか絶対に渡さない俺は力ずくでもお前を俺のものにする。」

真剣で一ミリのブレも感じさせない夏樹の想いに千子はたじろぐことしかできない。

「でも私は絶対になびかない。夏樹は好き。でもそれは恋愛感情じゃないの。」

「じゃあお前の兄貴に対する感情は本当に恋愛感情なのか？ただ今まで傍に兄貴しかいなかっただけで、もつと周りに目を向ければ違う可能性だって山ほどあるはずだろ？俺は絶対に千子を幸せにする。お前以外愛さない。兄貴みたいに妻との気休めにお前を抱くなんてことはしない。それだけは覚えといてくれ。」

返事をすることもできずに、千子は思わず夏樹の部屋を飛び出した。段を駆け降り、兄のいるリビングへ飛び込もうとしたが玄関の前で思わず足を止めた。

「ただいま。あら、千子ちゃんどうしたの？そんなに慌てて…。お父さんお母さん、今帰りましたあ。」

そこにはパンツスーツ姿の美夜が立っていた。

「はあい！お帰りなさい、美夜さん。あら、千子何してんのこんなところで。」

美夜の声にキッチンから出て来た母がきょとんと千子を見つめた。さっきの勢いを失って、千子はそのまま黙ってまた二階へと階段を登った。

私はみんながいるこの家で、兄に抱き付こうとも思っただのか。帰りの車の中で交わした兄とのキスの感覚が薄れていく。

美夜さんがもつと兄の傍にいられるようになれば、私の存在も薄くなっただけなのに…。

ふらふらと階段を登り終えた千子を夏樹が抱き留めた。

心臓がドクリと鳴る。

「大丈夫。俺ならそんな思いは絶対にさせない。」

千子は夏樹を突き飛ばして自分の部屋に逃げ込んだ。階段下から母親が叫ぶ。

「どうしたの？大きい音したけど大丈夫？」

「大丈夫だよ、母さん。いつものようにちよつと千子とケンカしただけ。」

「それならいいけど。夜遅いんだからあんまり騒がないでね。」

「ごめんごめん！分かってる！」

キッチンに戻る母親を見届けてから夏樹は一人静かに笑った。

「見てろよ。あぐらかいでいられるのも今のうちだぜ、兄貴。もう手段は選ばない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079c/>

黒蜜

2010年10月11日05時01分発行